

1月5日

## 「大能の力によって」

エペソ 6:10-13

武安 宏樹 牧師

「格闘」はレスリングと英訳されます。本書の時代は戦いばかりではなく、政治的には「ローマの平和」と呼ばれて、珍しく戦争のなかった時期でした。けれども見た目にどんなに平和でも、キリスト者になすべき戦いがあります。

3章までは、神が私たちが創造の前から聖い計画のうちに選ばれたこと。4章以降は「その召しにふさわしく」「古い人を脱ぎ捨てて」歩むべきことが、具体的には聖霊に満たされた生活(夫婦・親子・主従関係)による証しにより、世界大の教会形成の幻がありました。以上のキリストのからだの一部として、愛と赦しの信仰に生きることから、まず「大能の力」を知ることができます。偶像礼拝に満ちた地での宣教に「恐れおののいていた」(I コリ 2:3)パウロは、「説得力のある知恵のことばではなく、御霊と御力の現れ」に依存しました。

何時でも聖霊の力に強められるべきなのは、悪魔と相対しているからです。私たちの救いを奪うことのできない悪魔は、祝福を奪おうと策を巡らせます。「策略」は複数形で多様さを示します。だから素手で立ち向かってはならず、大能の力に強められ「すべての武具を身に着け」、重装備で格闘することです。対象は「血肉」つまり人間や組織や権力ではなく、背後で糸を引く悪霊です。祈りの手を下ろさない。口を開くことをやめない。奉仕の手をゆるめない。最も厄介なのは失望と落胆の霊です。悪魔は心の一番深い所を攻撃します。されど過敏になれば足元をすくわれます。戦い自体が目的ではいけません。真理により霊的足腰を鍛え「立ち向かい」「堅く立ち」「しっかり立つ」ことです。

昨夏から世の動きが急です。民主主義・歴史認識・平和希求を戦前回帰させ、そのための説明努力も不在であり、世界中がこの国の行く末を案じています。右も左もいろんな意見を尊重し合いながら、進めるのが民主主義政治ですが、偏狭な国家主義と目先の利益追求と弱者排除による、カルト化が進行中です。そういった時代の趨勢を見極めつつ、いたって霊的戦いであると痛感します。得体の知れない「強い国家像」に国民を奉獻させるのは、偶像礼拝の強要です。難しい戦いゆえ聖書的世界観を基盤に時代を読み、力をいただいて戦うこと。日本の宣教史上の最重要な局面です。その戦い様で宣教の未来は開かれます。

1月12日

## 「正しい戦い方①」

エペソ 6:14-17

武安 宏樹 牧師

「神のすべての武具」(13節)を取るのには、想像以上に悪魔が手強いからです。ですが、主の命じられたとおりに一つ一つ武装すれば、勝利が与えられます。

「立ちなさい」まずは御言葉の土台に足を踏みしめてから、前に出ること。

「腰には真理の帯を締め」帯は武具ではありませんが、着物を引き締めます。それによって攻めるにも守るにも敏速に動けます。まず主の前に静まること。静まる中で主の前に立たされて、戦いの動機が純粹か探られます(ヨブ 38:3)。

「胸には正義の胸当てを着け」心臓や肺など生死に関わる部位を守ります。正義とは自分のではなく神の正義を行うことで、霊的攻撃から守られます。正義と愛 & 信仰(1テサ 5:8)の一体性は、ダビデのゴリヤテ戦に見られます。

「足には平和の福音の備えを」戦いを進めるには、然るべき履物が必要です。運動や仕事と同様です。穴が空けば水が染み、釘が刺されればケガをします。合わない靴で歩くと靴擦れで苦しみます。福音自体に穴空きや事故はあり得ませんが、福音的生活にフィットしないで、律法的に縛られては福音の歩は停滞します。

「これらすべてのものの上に、信仰の大盾を」扉の意味もあるほど大きな盾。それにより謂われの無い中傷や、悪しき者の誘惑を撃退することができます。全能の主が盾となってくださり、私たちは信仰によって戦います(詩 35:)。そのようにして、万軍の主を信頼する者に約束されるのは守りです(詩 91:)

「救いのかぶとをかぶり」兜の家紋には、キリストの血潮が塗られています。頭を致命傷から守るのは、過去現在未来の全てに有効なキリストの贖いです。

「御霊の与える剣である、神のことばを」最後の剣は防御と攻撃を兼ねます。荒野の誘惑でキリストの戦い方は、力比べではなく御言葉の権威と信仰です。対する悪魔も御言葉を持ち出して対抗するので、知識だけでなく、血となり肉となる適用がものを言います。これに聖霊の電流が流れて鋭利となります。

1月19日

## 「正しい戦い方②」

エペソ 6:18-20

武安 宏樹 牧師

霊的戦いにおける完全武装の備えと共に、最後に欠かせないのが祈りです。武装して如何に立居振舞するか。攻め方を知らないといつまでも勝利できず、戦いが終わらない。自己流では宝の持ち腐れ、武具の扱いに訓練が必要です。

### ① 祈りをもって勝利する(18節)

「すべて」を表す原語が5回登場し、パウロは祈りのチャレンジをします。相手が手強いからです(12節)。とはいえ祈りを継続するのは至難の業です。居眠りの失態を犯したペテロが、「目をさましていなさい」(Iペテ 5:8-9)と、警告するに至ったのは聖霊を受けたからです。御業の背後に祈りがあります。「いつも油断せずに祈っていなさい。」(ルカ22:36)と主イエスは言われました。祈りに怠惰な私たちは聖霊の油注ぎがあつて、初めて祈ることができます。御霊の助けによって祈りの視座が与えられ、敵の本丸を攻略できるのです。定期的な祈りが苦手なら、アンテナを張って示された時に「芋づる式」に祈る。自分は弱くとも、罪と世と悪魔に支配された人々に対し福音の力は十分です。悩んでいる暇あれば祈る。カッコつけずに何でも祈る。御霊に止められたら、軌道修正すれば済むことなので、大胆に祈ることが私たちに必要なことです。

### ② 勝利のために祈られる(19~20節)

パウロは異邦人宣教の使命感の大きさと、にもかかわらず投獄状態ゆえに、自分の祈りだけでなく、周囲からも祈られることで、福音が自由に伝わって、使徒の務めが全うされることを願っていました。新約聖書に13もの書簡を書き送っていること自体、祈りのチームとサポート態勢を重視した証拠です。相手が手強いゆえ御霊に力づけられるのは勿論のこと、異なる賜物を持ったキリスト者が一致団結して、場所は異なれど同じ御霊によって祈ることで、本気で祈ってほしいならば、当り障り無い事柄ではなく、自分の弱さなどの本質的な課題を分かち合うべきです。そこに聖霊の取り扱いが為されるなら、悪魔は何もできません。ペテロの脱獄は背後の熱心な祈りのおかげでした。

そういうわけで「祈り&祈られ」、互いに祝福されていくのが初代教会の姿、あるべき教会像です。祈りの包囲網で風向きが変わり、時に神風となります。

1月26日

## 「獣の活動」

黙示録 13:1-18

武安 宏樹 牧師

### ① 本書の流れについて

当時は初代教会の使徒的情熱が冷め、霊的問題のある教会も登場しました。一方でローマ帝国の迫害は、ネロ～ドミティニアヌス治世で苛酷さを増し、皇帝礼拝を拒むキリスト者は、周囲の疑いと憎しみの対象となっていきます。ヨハネはそのような中で神の国実現の希望を持続するよう、幻で励まします。7～16章は7つのわざわいシリーズ(封印・ラツパ・鉢)で、徹底的さばきです。その後バビロンの大淫婦が没落し、神の勝利が賛美され、千年王国が到来し、暫し解かれるサタンも滅ぼされ、最後の審判・新天新地の大団円となります。

### ② 「海の獣」について

12章では大きな赤い竜がサタンの象徴として登場。獣は竜に協力する存在、「熊・獅子・豹」(ダニ7:7)の3つを総合した世界的国家権力として登場します。獣を通して自分を拝むよう強要するのが竜で、群衆は容易に従っていきます。皇帝礼拝は古今東西行われ、サタンは神と敵対する権力を捜し求めています。この獣は神に対するけがしごとを言い、キリスト者と教会に襲いかかります。けれども竜も獣も神の許容範囲(地理・時間・人)内で、猛威をふるうのみです。バアルを拒んだ7000人のように(Ⅰ列19:18)、神は真実な礼拝者を残します。私たちは悪口雑言を言われ、村八分にされ、非国民と言われ、不利益を被る。主イエスと先達の道ですが、幸いな約束も用意されています(Ⅰコリ10:13)。

### ③ 「地の獣」について

海の獣を助けるもう一匹の獣は、一見小羊のように優しく見えて、竜です。こちらは政治的指導者と結びついた、偽宗教指導者(偽預言者)を意味します。自分を拝む者に獣の刻印を受けさせ、経済活動を認め、拒むと締め出します。刻印なしに食っていけないようにする。サタンの手口は実に残酷なものです。「7つの教会」「7つの金の燭台」「7つのともしび」など、七は完全数として、聖書に登場します。何と言っても天地創造七日目の聖なる安息を想起します。しかし安息に及ばせない獣は人々を束縛し、もろもろの偶像に隷属させます。私たちはキリストに解放された喜びから、自由意志にて主の奴隷となります。獣の正体は明らかとなり、私たちには完全な神が共に居られます(7:16-17)。

2月2日

## 「忠実な部下」

1サムエル 24:1-22

武安 宏樹 牧師

サウルは部下を引き連れてダビデを追うも、御手に阻まれ捕えられません。それがほら穴で用を足すという意外な場面で、両者は鉢合せになりました。形勢逆転。ダビデには、無防備なサウルに対して打ちかかる絶好のチャンス。しかし部下の勧めを聞いて、天に向かって剣を上げた先に御声がありました。「剣をさやに収めなさい」(ヨハ 18:11)「復讐はわたしのすることである」(ロマ 12:19)脱力したダビデは剣を降ろした弾みで、すそを裂いたのではないのでしょうか。

ダビデが優先させたのは、状況より理性より周囲の声より主の御霊でした。自分も部下も危険なのに手を下さないのは、岩なる主のみ頼りたいからです。それだけでなく、わざわざ逃れ場から自殺行為に等しい降伏の呼びかけの為、「出て行った」のです。平和的な交渉で身の潔白を訴えることが解決策でした。もちろん無防備な精神状態と、情にもろい性格を熟知した上での行動です。率直に、謙虚に、愛をもって、論理的に、男同士で腹を割って話し合います。この感動的な演出の立役者は主御自身ですが、サウルの琴線に触れました。

声をあげて涙を流し許しを請う。これが本来の人情味あふれるサウルです。おまけに求められていない禪讓まで申し出る。彼なりの「悔い改め」でしょう。両者の会話を比較して分かることは、ダビデの言動の全ては信仰ゆえですが、サウルは個人的な申し訳なさと感謝ゆえで、主への悔い改めではありません。ポイントは「明け渡し(私)」です。浪花節の人情も涙もイコール真実ではない。それらは神の賜物ですが、だからといって罪と取り引きできるものでもない。王服のすそを裂いたことさえ、悔い改めに導かれたダビデは忠実な部下です。

主に仕え、人に仕えるダビデの姿は、キリストに見られます(ピリ 2:6-9)。「善意をもって仕え」(エペ 6:7)たからこそ、ダビデは王、キリストは王の王に、高く上げられたのです。自分の特権をかなぐり捨て、悪魔の誘惑と対決して、穴に隠れるでも不意討ちでもなく、外へ出て行って死を恐れず仕えました。私たちも主に仕えるように敵を愛し仕えましょう。主がそうされたからです。

2月9日

## 「賢い女性」

Ⅰサムエル 25:1-44

武安 宏樹 牧師

ダビデはヨナタンやサウルから、次の王との確約を得たにもかかわらず、未だ心から受け止めきれませんでした。大預言者サムエルの死を通して、少なからぬ心理的影響がダビデを前のめり気味の心に導いたと思われます。そこへ頑迷で恩知らずな富豪ナバルから、門前払いに等しい対応を受けて、ダビデはカチンときた。部下の後押しもあり、成敗せんと立ち上がります。客観的に妥当性十分、主観的にも心の狭い男は許しがたいと思われましたが、この計画の是非に関して、主からの直接的な語りかけはありませんでした。

その代わりにナバルと対照的に、「聡明で美人」な妻アビガイルが送られた。御使いに等しい彼女の介入で、ダビデへの同情と夫の断罪という祭司的役割、加えて王位継承者ゆえ無駄に血を流すことは控えるべしとの預言者的役割。ダビデは彼女の存在に感謝しつつ、間接的な悔い改めの促しと受け止めます。キリスト者が罪を犯さないために、主の守りは時に人を通して現されます。それは強制的ではなく、深く考えて自由意志をもって主体的に選ぶものです。その行為が明らかに罪というより、将来など多面的に考えて罪と分かります。

アビガイルは夫を下げたのでも、ダビデに取り入ろうとしたのでもなく、霊的洞察ゆえでした。この「見分け」は聖霊の実および賜物として登場します。その正しさの証拠にナバルは急死、ダビデは合法的に彼女をめぐりました。主の御手の中で万事が益となった。あの時に衝動的にナバルを打っていたら、王となった暁に胸を張れない。主の御手あつての自分と謙虚な気持ちにされ、助け手なしには何もできない、ナバルも自分も同じ弱い男だと思ひ至ります。

不利益を被って憤る時、手っ取り早く復讐をしたくなる感情は自然ですが、復讐すべき人には主が復讐し、愛すべき人には神が助けを送ってください。アビガイルは言葉以上に、男二人の緩衝材として神の通りよき管となった。

そこにキリストの十字架と、いかなる罪も悲しまれる聖い愛が証されます。ダビデは復讐で金品をせしめるより、はるかに尊く平安な恵みを受けました。「良い妻を見つける者はしあわせを見つけ」(箴 18:22)男女の助け愛を通して、男の殺伐とした戦いでは得られない温もりから、ダビデは心の憩いを得ます。

2月16日

## 「掘り出された穴」

イザヤ 51:1-3

吉持 章 師

私と福音との出会いは 1953 年、岡崎城跡(現花時計)でのフランデル師による天幕集会でした。その時もらった集会案内裏面の、使徒行伝 17:22-25 を読んで神様を求め始めました。今から 61 年も昔のことでした。その後、1954 年 3 月 29 日に受洗へと導かれました。

### I 愛宕山教会最初の献身者として

1955 年 4 月東京の日本クリスチャン・カレッジに入学しました。卒業後、フランデル師に連れられてこの岡崎の地の下見と一緒にしました。そして 1959 年初代伝道者として就任しフランデル師のもとで指導を受けました。

### II 1960 年帰国時残された師の言葉

身体の弱かったフランデル師は帰国する時に「今、私は国に帰ります。しかし失望してはいません。鈴木さんがここにいるから。」と重い外套を着せられました。この言葉は今も私の支えとなっています。

### III 託された使命

フランデル師からの委託から生まれた私の使命は献身者 50 名の祈りでした。現在 42 名の献身者が起こされました。

結び～SAM日本宣教 25 周年誌に残された、フランデル師の結びの言葉。

「岡崎公園で初めてSAMの天幕集会を開いたとき、ちょうど台風が来て、天幕が倒れて集会は中止することになってしまいました。この時、目で見ることのできる結果は若い大工さんが決心したことでした。後になって彼は、神の国の建設のために一人の建築家になるようにされました。彼は金槌と釘を置いて、他の道具...その道具は剣よりも鋭い神のことは...を取って、牧師になりました。彼の名は鈴木章(現在の吉持章)師です。後に愛宕山教会を建てた時、彼は最初の牧師になりました。と、結ばれています。

鉄くずにすぎなかった者を神様が手をかけられると変わります。宣教師の涙があったから今の私たちはあります。

2月23日

### 「敵によって成長する」

Ⅰサムエル 26：1-25

武安 宏樹 牧師

本章は24章の繰り返しに見えますが、罪のしつこさが発展的に語られます。ダビデは神の選び・キリストの贖い・御霊による聖めの一体の中にいますが、サウルは神の遺棄・罪の呪い・悪霊との親和性から容易に脱せない状態です。信者と不信者との間には越えられない一線が引かれ、キリストの血潮以外に、解決は得られません(エペ2:)。ダビデはサウルの背後の敵と戦っています。

ダビデ発見の報に、前回同様3000人の兵を率いてしらみ潰しに搜索するも、主はサウルの目を塞ぎ、ダビデはまんまと本丸侵入も殺害を思い止まります。それは自分が手を下さずとも、やがて主が復讐されるという確信によります。代わりに敵を刺し通す槍と、自分の命をつなぐ水差しを回収。牙を抜きます。こうして武装解除には成功しましたが、だから戦いが終わるわけではない。二度も殺害を寸止めたのは主君への愛と、その忍耐と知恵の訓練でした。

「忠実競争」でダビデはアブネルに完勝し、強烈な皮肉を浴びせます(15節)。これは背後のサウルへのパフォーマンスでした。ただの武装解除ではない。忠実さだけでもない。嫉妬にかられ追跡を続ける愚かさの自覚を促しました。今回は第6戒「殺してはならない」を根拠にしましたが、今回は最重要である第1戒の偶像礼拝禁止の観点から、二人の関係よりも主との関係に訴えます。アロンの金の子牛事件、サウルの間違った犠牲がどれほど主を怒らせたのか。それによって王失格の烙印を押された苦い過去を思い起こさせつつ(15:)、ダビデはサウルを何とか悪霊の支配から、主の前に引き戻そうとするのです。

残念ながらサウルの反応は変わらず、両者の隔たりは埋められなかった。隔たった山の頂で相対する両者は、片や滅びの山、片や聖なる山に立った。ダビデが懸命に語った福音は距離的には届くも、心には届きませんでした。耳におおいのかけられた民に向かい、それでも福音を語り、善を行い続ける。ダビデは王となる前の暫しの間、滅び行く魂を愛する訓練に与っていました。預言者たちの涙と祈りを思います。救霊愛でダビデの人格は練られたのです。

3月2日

### 「追っ手をのがれて」

1サムエル 27:1-12

武安 宏樹 牧師

ダビデとサウルは再び別れて帰り、サウルに信仰的な変化は起こりません。やがて心乱れたらまた追われるでしょう。何とも徒労に思える逃避行ですが、ダビデは捨て鉢にならず、淡々と主に従いながら、現実的な方策を考えます。結果的に敵国へ逃れるしかないですが(1節)、難しいのは敵国での生活で、信仰者として、来るべき王としてアイデンティティを保つのが至難の業です。「いまに滅ぼされるだろう」と約束と裏腹の不安が、彼の脳裏に去来します。

これを不信仰の言葉だと言い切れるでしょうか。そうかも知れませんが、不安はだれにもある。ダビデも例外でなく、主イエスも同様です(ヨハ 12:27)。主イエスは不安がよぎるも支配されるのを拒み、十字架への道を歩き出した。ダビデはそこまではなくとも、最も信仰的と思われる現実的一步を踏んだ。かつては単独行動でしたが(21:)、今回は600人の集団行動なので大変でした。住環境も霊的環境も整えてやるのは、彼の羊飼い経験を想起します(詩 23:)

ダビデはヨナのように、主の御手を避けて逃げているわけではありません。反対に、主の御手によって、敵であるペリシテ人の地に追いやられています。だから逃げる目的地が何処であれ、「主は私の羊飼い」であり、共に居られる。常に死と隣り合わせ。ばれないように皆で偽りを重ねるのも大変なことです。本章の記述は「偽り」「侵略」「虐殺」ばかりで、高尚な内容は見られませんが、「ほかに道はない」とつぶやくダビデが暗澹たる心だったかは、疑問でしょう。時が来れば主が帰して下さる。そう考えると必ずしも悪くはありません。

私たちは往々にして判断を急ぎます。自分が平安なら主に感謝しますが、戦争状態や罪のどん底にあれば、何故こんな状況になったのかすぐ分析して、ヨブの三友人のカウンセリングのようなことを、自分や他人にしがります。表面的事柄で即断するより、全容が見えずとも信じて歩き出すこと(創 12:)。私たちは正直に聖く生きたいと願いますが、主の導きはそうとは限りません。偽らざるをえなかったことで、ダビデは器を広げられたのでないでしょうか。アキシュにも信用された偽りの背後で、真実な霊がよき証しとなったのです。

3月9日

### 「敗北宣言」

Iサムエル 28:1-25

武安 宏樹 牧師

サムエル存命中は、禁じられた霊媒や口寄せなど論外でしたが(レビ 19:31)、サウルは彼らを形式的に追放しつつ、居場所は把握して温存していました。主に 100%の信頼を置けない者は、他の霊的な存在に魅力を感じるものです。ペリシテの大軍勢を恐れて主にすがるも答がなければ、偶像や霊媒へ走る。サムエルに三行半を突きつけられた時から、霊的に成長していませんでした。霊的成長とは主との信頼関係の成長で、主以外の偶像や霊を憎むことです。

「あの時」にサウルとサムエルの関係は完全に決裂したはずでしたが(15:)、未だにサウルは恐るべき宣告を撤回できないかと、真剣に期待していました。自分に厳しい御言葉は無視をする。自分中心の御利益信仰の馴れの果てです。彼には主より亡霊の方が身近らしく、女霊媒師にサムエルを呼んでもらった。平気で「主は生きておられる」と言い放ち、禁忌を犯すサウルは霊的死人です。サムエルの神々しさと背後の主に戦慄を覚えた彼女の方が、余程まともです。

これ幸いとひれ伏すサウルが聞いたのは、思い出したくない「あの言葉」で、加えて①友＝ダビデ、②一族戦死、③イスラエル敗北、が明らかにされます。預言は無効にならないばかりか、最も有難くない三点までも宣告されました。呼べど答えぬ沈黙の恐怖の一步先に待ち構えるのは、彼の最も恐れる死です。「神が」去ったと言うサウルに対し、サムエルは「主が」と7回繰り返しました。「主」とは絶対主権者なる神に対しての、契約的な信頼関係からの呼び名です。

主への恐れも信頼もないサウルは、よそよそしい表現しかできなかった。彼にとっての主は、律法&儀式の範疇および自分の必要とする時だけでした。対してダビデは苦しい逃避行で、主と親しく交わらざるを得ませんでした。詩 22 篇は遠く離れているように感じる神を、ダビデが叫び求める激情の詩で、主の臨在を捜し求め、信頼を訴え、賛美する中で、「神→主」へ変えられます。答だけくださいという霊媒師でも代替可能な求めとは、天地の差があります。サウルへの敗北宣告とは先の三点以前に、神との交わりの最後の断絶でした。ダビデの勝利宣言は、主との親しく深く熱い交わりから賛美へと昇華します。

3月16日

## 「二枚舌外交」

Ⅰサムエル 29:1-11

武安 宏樹 牧師

ペリシテとイスラエルの全面戦争に際し、アキシュが従軍を求めたところ、ダビデはどちらとも取れる絶妙な答で、かえって王の信頼を得てしまいます。にっちもさっちもいなくなつたのは、重ねた偽りゆえだったのでしょうか。王のダビデ合流案に、首長たちは「所詮サウルの犬に過ぎぬ」と抗議します。強引に入れても軍全体の士気を下げず逆効果と考えたか、あえなく断念し、大変申し訳ないが帰ってくれと、ダビデの気持ちを損ねぬよう頭を下げます。「主は生きておられる」とアキシュが誓うのは、相手の信仰への敬意でしょう。同じ誓いをイスラエルの王が迫害のため、異邦人の王が賛辞のため送るのは、何とも面白い。その背後でダビデは、御手の中で奇跡的に窮状から脱します。割礼なきペリシテ首長たちの意見を用いて、対イスラエルの無用な参戦から、お世話になったアキシュに背くことから、堂々と抜けることができました。

突然の処遇に抗議まで行つたダビデの役者ぶりは、いやらしいほどですが、本心がどうだったのか不明です。もしかしたらアキシュへ個人的な思いも、芽生え始めていたかも知れません。二枚舌の背後に、真実な心も透けてくる。うろたえるアキシュへも、ダビデの信じる主が強烈に証しされたはず。「神の使い」とまで言うなら、彼を残せばよかったではと思いたくなりますが、かつて惨禍を巻き起こした「契約の箱」(5:)が、脳裏にあったかも知れません。つまり主が報復の神であること、同じ聖さがダビデの背後にあるのを感じて、自分たちにはそぐわない神の使いと、あえて敬遠したのではないのでしょうか。

使徒パウロは異邦人教会の聖徒たちに向かって、奥義を告げます(エペ 2:)。ユダヤ人と異邦人の真の一致は、キリストの贖いを待たねばならなかった。「主は生きておられる」を自由の律法を持つ者ダビデ、無律法の徒アキシュ、律法主義に墮落したサウルが、同じ台詞を三者三様に誓うのが不思議です。偽り単体で考えるなら、決して誉められたことはありませんが(箴 15:4)、ダビデはそれがただ主に用いられたことを、へりくだって認めるのみです。時至ってキリストが律法の壁を撤廃し、二枚舌は改めて不要になりました。キリストの御霊による賛美の霊が、私たちに真実の言葉を語らせるからです。

3月23日

### 「失地回復」

Iサムエル 30 : 1-31

武安 宏樹 牧師

#### ① どん底から奮い立つ(1～20節)

ペリシテ従軍の危機を、すんでのところ解放されたダビデ一派でしたが、一日 40 kmの行軍の末に帰着したツイケラグは、目を覆うばかりの惨状でした。そもそもがサウルの不満分子を糾合した集団ゆえ、不満は容易に爆発します。600 名がやり場のない怒りと失望をダビデに向け、彼はどん底で苦しみます。サウルは霊媒に走りましたが(28:)、「しかし」(6節)ダビデは主へと走った。彼の問いは追うべきか&追いつくかでしたが、加えて主は救出を約束します。「奮い立つ」=「自分が自分を強める状態に置く」意。身を置くのは自分ですが、強めるのは主の働きなので、彼は鼓舞する聖霊の力を自ら受け入れたのです。主の臨在は孤独感から解放し、御声への期待感を生み、祈りが動き出します。< BR>中途半端な求め方で、漠然と抽象的な確信しか得られないと、具体的な戦略を立てられず、部下を鼓舞できません。失敗や無理を強ければ反発を招きます。彼の力強い信仰が 600 人を奮起させ、そのうち消耗の激しい 200 人は休ませて、ダビデと 400 名はアマレクに奪われた全ての家族と財産の奪還に成功します。

#### ② 新しい王国のあり方(21～31節)

高揚感あふれる 400 名の一部が、分捕り物を休んでいた 200 名に与えるのは、いかがなものかと注文をつけました。奪還した者が分け前に与ること自体は、理に適ったことですが(創 14:)、双方で格差と不満の温床となりかねません。リーダーの手腕が問われますが、ダビデは分け前の配分という経済的事柄を、主の恵みの配分という神学的事柄に昇華させ、全員で分けることに決めます。見事なリーダーシップです。主に叫び求め奮い立ち、民を励ますだけでなく、決めるべきことをきっちり決めて、強者も弱者も不満が出ないようにしつつ、全員が同じ主を見上げさせて、集団のアイデンティティの再考を促していく。新自由主義でも共産主義でもなく、一人一人へ動機づけを行う「教会論」です。ダビデ奮起までは 600 名でヴィジョンを共有、分かれたのはそれ以降だから、残った 200 名は休みながらも同じ思いで、祈りのサポーターとなっています。ダビデは王国に、新約時代のキリストのからだ(Iコリ 12:)、主の愛を基に、有機的で広がりをもつ初代教会の理想を展望していました(エペ 3:18/使 4:)

3月30日

### 「哀しき最期」

Ⅰサムエル 31：1-13

武安 宏樹 牧師

本書はサウルの死で終わります。サムエルの宣告、部下の逃亡、身内の死にも捨て鉢にならず、最後まで戦い抜いた末に、切腹をもって自ら死を選ぶ。王としての責任感と筋を通す生き様は、武士道のように美しくもありました。最後は一定の評価を与えられていますが、私たちはどう見るべきでしょうか。

宗教的には神と預言者に見捨てられたサウルでしたが、ヨルダン川向うの住民にさえ衝撃をもたらした事実は、政治的にはイスラエル全土を掌握して、民全体の支持を得ていたことを示します。ダビデ派はまだ一セクトでした。道徳的に退廃していたかといえば、ダビデのような派手な女性問題もなく、総じて真面目な王でした。真面目でも不信仰ではと断罪するのも少々酷です。なぜサウルは×で、ダビデは○なのか。悔い改めの早さと深さの相違なのか。神の選びならば不公平ではないか。これに異議を唱えることは間違いなのか。

疑問を解く鍵となるのは、サウルを「私人」でなく「公人」として見ることで、サムエルが放縦な民からの王の要求に憤慨した時の、主の答を思い起こせば、受け入れがたい要求を、予想に反して主は受け入れられた。甘く思えますが、主は見過ごしにされたのではなく、さばきを保留していたのに過ぎなかった。主を退けた民のわがままで導入された王制の行く末には、時間が必要でした。つまりサウルは個人的な遺棄に加え、イスラエルの罪責を負わされたのです。ある意味気の毒ですが、キリストの十字架のひな型となった功績もあります。単に彼を罪人と片付けるだけでは、見落としてしまいがちな意外な側面です。

さらにサウルの転落に、私たちの罪深さを重ね合わせて考えることです。彼は主に心を開かないかたくなさゆえ、自分を守ろうとしてダビデを恐れた。この罪の性質を神は憎まれます。私たちも同様の弱さを持ち合わせています。アダム以来、人間を子々孫々汚染してきた罪がどれほど深刻なものであるか。そして「ねたむ神」(出 20:5)は、ご自分を拒む者を見せしめに滅ぼされる一方、ダビデのように心開く者に、王座を独占して一方的な愛を注ぐ激しい方です。聞いても信じない者には滅び、信じても従わない者にはさばきで栄光を現す。その御手を知らずに抗ったサウルは、職務を全うしても徒労に終わりました。

4月6日

## 「恐れません」

詩編:1-13

武安 宏樹 牧師

### ① 恐れのみただ中で信頼する(1～4節)

ダビデを踏みつける(呑み込む)のは外敵か内敵か。数はたくさんでしょう。あるいは背後で糸を引く悪魔の影か。体中だけでなく心の内まで侵食します。恐れの間がブラックホールのように待ち構えます。休みなく一日中恐れま。私たちは恐れると判断停止し、心が暗くなります。放ると傷になり膿みます。でも恐れなんかないと豪語しても、空しいだけで根本的な解決になりません。ダビデは恐れを否定せずありのまま受け止めて、力を抜いて主を見上げます。恐れと希望は共存しないようで、しかし恐れに苛まれる中で希望が沸きます。「ほめたたえます」が強調形なのは、御言葉に襲われ敵が卑小化するからです。

### ② 涙の皮袋(5～11節)

5節で苦しみの光景に戻るのとはなぜか。恐れへの解放が不十分なのではなく、「襲い、待ち伏せ、あとをつけて、いのちをねらう」敵の執拗さを描きながら、さらに具体的に信頼＆解放の過程を掘り下げます。自力で対処できないのは、敵の攻撃性ゆえです。「襲い＝結束」とあるので狼群に囲まれる羊の状況です。自分に不法があるなら返り討ちに遭いますが、御言葉によって謙遜にされて、敵の不法を訴えることができます。「さすらい」はカインはさばき故でしたが、ダビデは主にある「寄留者」(Iペテ2:11)ゆえ、孤独と苦難を経験しています。流した涙の数さえ記録されて、深い感情レベルの交わりで神と一つになって、出エジプトの救いの「主」を覚える賛美により、敵軍は四分五裂&敗走します。

### ③ 感謝のいけにえ(12～13節)

「救い出してくださいました」(完了形)は、真っ只中でも神の助けを確信し、神に感謝を捧げる用意が出来ているからです。取り巻く状況に変化なくとも、「光はやみの中に輝いている」(ヨハ1:5)光の中にいるなら救われたも同然です。恐れは出発点。そこから変えられていく感動の方が、頑張る人より強いです。キリストを神の御子と告白する者は、そのうちに聖霊の臨在を約束されます。「全き愛は恐れを締め出します」(Iヨハ4:18)愛＝神の愛。恐れは律法&奴隷的。その恐れは呑み込まれようとしています。私たちのゴールは栄化だからです。

4月13日

### 「悩む者、貧しい者」

詩篇 70:1-5

武安 宏樹 牧師

詩 70 篇は詩 40 篇 13~17 節とほぼ同じで、省略した註解書も多くあります。比較すると 40 篇は過去の恵みに思いを馳せつつ、現在の苦しみと戦っている。対して 70 篇は過去の部分を割愛し現在に絞って、祈りの緊急性を訴えます。通常は「数えてみよ主の恵み」(新聖歌 172)と黙想し、祈りの視座を定めます。でないと私たちは一生懸命でも、的外れで自己中心な祈りになりがちです。いわば 40 篇＝苦難の祈り、70 篇＝大苦難の祈り。短い後者の方が実は難しい。いきなり「救い出してください。助けてください。」と祈る方向性が難しい。答えは「悩む者貧しい者」の立ち位置にあります。恵みを振り返る余裕さえ、ないほどの緊急性なら、それだけ集中して神と自分の関係を覚えるからです。

この「悩み」「貧しさ」は私たちの想像と異なり、主にすぎる者の貧しさです。二語はセットで頻出します。原語の意味からは「柔和」「謙遜」が出てきます。思い起こすのは「幸福なるかな。心の貧しき者〜」(マタ 5:)の八福の教えです。敵に取り囲まれ苦しみ絶頂にある者に、「幸福なるかな」と繰り返し励まし、具体的祝福の数々を約束する。だから悩む者貧しい者加えて余裕のない者の、直截的な祈りは聞かれています。詩篇は祈りです。砕かれたら深く祈れます。祈りたいのに祈れない、悩む者貧しい者になって、聖霊に導かれて祈れます。僅か5節分ながら、全てを「今」に注入した祈りの中に濃厚な世界があります。

『あはは』とあざ笑う子どもは、十字架上の主イエスに向いています。「救い出してください。助けてください。」は主イエスの言葉として響きます。これは人の子としての側面です。同時に「どうしてわたしをお見捨てに〜」は、契約の民としての叫びを超越して、遺棄の絶望の淵を経験した超人的叫びで、「父よ。彼らをお赦してください。」(ルカ 23:34)は、敵を超自然的に愛する叫び。これは神の子としての側面です。主イエスは全き人の子&全き神の子ゆえに、聖霊は悩む者貧しい者の祈りを十字架へと追いやりません。旧約から新約への、進化(深化)を見る思いがします。受難週に私たちがこの祈りを心底祈れたら、何と幸いなことでしょう。この絶好の機会に祈らないのは勿体ないことです。

4月20日

## 「キリストが私のうちに」

ガラテヤ 2:20

武安 宏樹 牧師

本書は「靈的奴隷解放の大憲章」「教会の自由に関する大憲章」などと呼ばれ、宗教改革者ルターは「この手紙と結婚した」と語る、信仰義認の教理についてローマ書と並ぶ重要な書簡です。その背景に律法主義との戦いがありました。救いがキリストのみで律法が不要ならば、キリストは罪の助成者ではないか。彼らの批判に対してパウロは明確に否定しつつ、律法を通して罪が示されて、キリストの下へ追いやる「養育係」(3:24)の役目となることを示しています。キリストの恵みによる救いは、人間的努力による律法の救いとは次元が違う。「死にました」(19節)は、過去1回きりの行為を表す時制の動詞が使われます。律法の行いに頼る古い人が完全に死んだことで、神に生きる者となりました。「つけられました」(20節)は、過去の行為が現在まで続く時制が使われており、「つけられています」がふさわしい。それはキリストとともに生きることです。キリストが私の内に生き、私がキリストの内に生きる。互いに内住しあって、私たちは造られ&選ばれ&愛され&赦され&善行が導かれます(Ⅱ コリ 5:17)。この結合は人格喪失とは違います。罪人が義人と結合し、同一の戸籍に入る。神の目には二人だけど一緒に見られ、法的に「二人とも義人」と見なされます。義認が法的な婚姻関係スタートならば、靈的結合関係の深まりが聖化です。キリストと死んで生きるだけでなく、結合には必ず実が伴います(ヤコ 2:17)。以上のキリストとの結合による聖霊体験を、律法主義は機能不全に陥れます。「あの無力・無価値の幼稚な教え」(4:9)、「その者はのろわれるべき」(1:8)と、パウロが敵意をむき出しにしたのは、キリストが私たちを奴隷としてでなく、御霊による自由と喜びを得させるため、解放してくださったからです(5:1)。聖化の過程で古い肉(律法主義)の性質とのせめぎ合いで、砕かれ痛みますが、「キリストが私のうちに」住む実感を味わうことで、信仰も成長するので

4月27日

### 「新しい人の生き方」

コロサイ 3:15-17

近藤 幸子 師

先週 20 日は復活祭でした。コロサイ 3 章 1 節からはキリスト者の生き方が記されています。キリストとともによみがえされた者、すなわち新しい人としての生き方をパウロの教えた信仰生活に学びます。

#### ① 心はキリストの平和が支配するようにしなさい(15 節)

キリストの平和に支配されているでしょうか？ 外的な要因によって心が騒いでいないでしょうか？ パウロはコロサイ 2:7 で信仰を堅くしなさいと言っています。堅くするということは安定させることです。様々な試練など信仰の訓練を通して信仰は安定します。そしてその結果、心の中はキリストの平和に支配されます。この平和は信仰による賜物です。そして外的要因によって揺るがされるものではありません。そのためにも私たちは常にイエス様に目を向けていくことが大切です。

#### ② キリストのことばを豊かに住まわせる(16 節)

そのためにはまず、キリストの語られたことば、すなわち聖書のみことばを心に蓄える必要があります。そしてみことばを蓄えることはキリストが私たちの心に住んで下さることであります。

教会に集められた一人一人はからだの各器官として集められたひとつのからだです。それゆえ主にある兄弟姉妹は互いに教え合い、また信仰を確かめ、そして祈り合うことが求められています。キリストのみことばが信仰生活に即しているかを確認しつつ、恵みを受けながら成長していくことが教会の使命だと言えます。

#### ③ すべてのことを主の御名によってなす(17 節)

私たちが主の御名によって祈る祈りは全て、主に委ねることが前提におかれています。だからイエス様ならこの場合はどの様にされるかを思い巡らすことが主とともに歩むことにつながります。

新しい人の生き方は心がキリストの平安で満たされ、キリストのことばを心に豊かに蓄えて歩む時に感謝があふれると語っています。

5月4日

### 「勇士たちは倒れた」

Ⅱ サムエル 1:1-27

武安 宏樹 牧師

本書の書き出しは、ヨシュア記でのモーセや士師記でのヨシュアと同様に、先人の死をもって始まるのは共通ですが、丸1章分割している面で特異です。ダビデ軍の戦況は先のアマレク戦勝利で幾分建て直しましたが、王と本隊が気がかりでした。そこへ喪中の格好をした在留アマレク人が駆け込んできた。ダビデにとっては主君と無二の親友を同時になくすという、衝撃の報でした。若者は王殺しを自供。委託殺人や自殺幫助であっても、殺しには変わりない。彼としては王冠や腕輪と引き換えに褒美を貰えると思えば、大間違いでした。主に油そそがれた王と知りながら手をかけた彼は、即死刑執行となりました。

いくらなんでもそこまでやるか？ 厳しすぎるのでは？ それがダビデです。国全体の統率のために断行したなどという、人間的思惑などではありません。主君への哀悼も、手を掛けた者への怒りも、偽りない彼の心からの感情です。ダビデも「主に油そそがれた方」に手をかける機会を以前得たにも関わらず、拒否したのに(Ⅰサム 24:6/26:9)、安易に殺した者への怒りは凄まじかった。主が油そそがれた者である以上、「王を愛して王制を支持する＝主を愛する」王の間違いをさばくのは神であって人ではない。自分には従うことしかない。ダビデはいたってシンプルな信仰を持つ故に、王を殺した若者のみならず、異邦人に殺されたと諸国が聞いて、主が無力な神と映るのが耐え難いのです。

あふれる思いは哀歌となります。先人が死んだ途端に悪口を並べ立てたり、何もなかったかのようにふるまうのではなく、尊敬をもって生涯を振り返る。二人がどれほど偉大で愛されたか。また敬愛に値する人物か歌を詠みます。「わしよりも速く、雄獅子よりも強い」まさに主に油注がれた無敵の王を想い、悲しさと寂しさと突然やってきた王位継承に、謙虚に心の整理をするのです。サウルに國中へ悲しみを求めるのに対し、ヨナタンには個人的に悲しみます。「主がふたりの間の永遠の証人」(Ⅰサム 20:42)と折れそうな心を支えた親友は、逝ってしまった。ひとしきり涙を流したら、いつまでも悲嘆に暮れていては、天の友に叱られます。三度目に「ああ、勇士たちは倒れた」と締めくくります。では誰が彼らに代わって立ち上がるのか。哀悼は再献身を誓う時間でした。

5月11日

### 「内なる戦い」

Ⅱ サムエル 2:1-32

武安 宏樹 牧師

サウルとヨナタンへ哀歌を捧げた後で、いつまでも悲しんではいけない。アマレクに勝利して勢いづいたダビデですが、次の一步の前にまず祈ります。ユダ行が是非か、具体的にどの町か主に伺って、初めてヘブロンに上った。ダビデの王としての歩みは、焦らず一步一步地固めを行うように思えます。

8節以降はサウル軍残党のアブネル、ダビデ軍のヨアブの両将軍が登場し、ダビデは退場するも、彼の意図に反して分裂状態となった両軍が激突します。そもそもは兄弟同士のゲームで始まったのが、本気の殺し合いに発展します。敵はペリシテであり、内輪もめしている場合ではないのですが、ダビデ軍が大勝利を収めます。ただ深追いたしたヨアブの末弟アサエルの戦死が尾を引き、逆恨み以上に無駄な消耗戦を避けたいアブネルの提案で、停戦となりました。

この戦いの責任は誰にあるのか。言い出したアブネルか、駿足に拘泥したアサエルか、弟を制御不能にしたヨアブか、ダビデのリーダーシップ欠如か。内輪もめは誰のせいとかではなく、みんな罪人ゆえに連帯責任は問われます。主イエスは十二弟子の中で誰が一番偉いか議論しているのを聞いて(マタ 20:)、兄弟間でいのちを与え合うサーバントリーダーシップを説き、地で行きます。ダビデもかつてアマレク戦で分捕り物を巡る見事な采配のように(Ⅰサム 30:)、両将軍の間に入って内輪もめを制止すべきでしたが、どうやら力不足でした。そこで強引なリーダーシップよりも、謙虚な祈りを選んだのはベターでした。

教会内や教団教派間で、自分の賜物を誇って争いを引き起こす者がいます。摂理の中で様々なグループが存在するゆえ、互いに尊び合わねばなりません。「キリストが分割されたのですか」(Ⅰコリ 1:13)とパウロは分裂状態を嘆きつつ、私たちがキリストのからだの一員との、意識の共有の必要性を説いています。内なる戦いは悪魔がつけ入る隙となるゆえ、まずは自分を吟味することです。ダビデの視点はヘブロンを拠点に、ユダから全イスラエルへ一致の拡大です。敵を間違えてはなりません。私たちの目的は福音を携えて出て行くことです。キリストによる一致と外向きの重要性、そのため祈るダビデに教えられます。

5月18日

### 「悲しき同士討ち」

Ⅱ サムエル 3:1-39

武安 宏樹 牧師

サウル軍とダビデ軍の小競り合いが続き、徐々にサウル軍は弱体化します。アブネルはやがてダビデ軍に吸収されると考え、長老たちと合意を取り付け、部下 20 人を引き連れて「固めの盃」を交わし、事実上ダビデの軍門へ下ります。入れ違いに帰って来たヨアブはそれを聞いて激怒し、アブネルを暗殺します。ダビデはこの行為を非難し、彼に葬儀委員長を命じ、自身は悲しみ断食します。結果的に大方予想したダビデ関与説が否定され、「民を満足」(36 節)させます。

ダビデの一連の演出について、いやらしいと思われる向きもあるでしょう。けれどもダビデとしては、平和的統一の立役者となったアブネルを高く評価。その反面、有能で忠実ですがマイペースなヨアブには手を焼いていました。ダビデが重視していたことは、①人(上司)に忠実であるより神に忠実である、②無駄な血を流さない。平和を求めたアブネルが剣で倒れたのは皮肉でした。アブネルは「安心して出て行った」(21 節)とありますが、何も考えなかったか。もしかしたら両軍の対立を止めるため、自ら犠牲になったのかも知れません。「シャローム」とあるように、ダビデと合意を取り付けて平安を得たのです。だとしたらアブネルは日和見主義者ではなく、究極の平和主義者でしょう。ダビデの悲しみ 様は演出以前に衷心からで、民の胸に刻みつけられました。

39 節の謙虚な言葉はダビデの心を表します。ヨアブらを制御はできない。もしかしたらアブネルに対して、故人ヨナタンの姿を重ねたかも知れません。ダビデも疲れを覚えていたのですが、それは適わず、ただ主を信頼して、ヨアブら厄介者に対しては、何事も主の報いを期待する信仰が求められます。そういうわけで三者三様の期待・怒り・悲しみが渦巻きつつ、それらを用いて、神の御手は両王朝の統一と、本格的なダビデ王制の発足へと動いていきます。人間的思惑よりも神の御手が先立つ重要性は、教会形成にも全く同じです。自分の主張を押し通すと分裂しますが、日和見と言われようと主に委ねて、柔軟に応じれば、教会の主であり平和の君である方が徐々に修復されます。先走ってさばいたり、御心より人間的な思いを優先すると聖さが低下します。三者三様の計算が狂わされながら、神の御手が進行することに教えられます。

5月25日

## 「血の責任」

Ⅱ サムエル 4:1-12

武安 宏樹 牧師

サウル軍の王イシュ・ボシェテは、將軍アブネルの死に意気阻喪します。そこへ略奪隊のレカブ&パアナ兄弟が、王の寢室に忍びこんで惨殺します。彼らは主の使いであるかのように、意気揚々とダビデに王の首を献上するも、無辜の王に手をかけるとは不逞不遜の輩ぞと、手足切断の上で処刑されます。

「血の責任」(11 節)とありますが、聖書では血について三つ挙げられます。一つは戦争(暴力)による血。カインの弟殺して流された血にのろわれ(創 4:)、ヨセフを妬む兄たちが服に獣の血をつけ、父は子が死んだと悲しむ(創 37:)。「殺してはならない」(出 20:13)とあるように安易に血が流されてはならない。人間が「神のかたち」(創 9:6)に造られたからです。血で儲けようとする者は、いつの時代も絶えず、世の戦争の背後に悪魔的要素があります(箴 1:11-14)。血の責任は自分にふりかかり、罪意識ゆえに死を余儀なくされます(ヨハ 8:44)。神の被造物である生命に手をかけると、報酬として怒りとろいが下ります。

二つ目はいけにえの血です。旧約時代は注意深く血を絞り出して肉を食べ、血を流すことなしには罪の赦しがない真理を、食事のたびに想起しました。いけにえの血は神が備えられ(レビ 17:11)、「血」「いのち」は同格です(創 9:4)。血を流すことは軽々しく行うのではなく、罪人の身代りのため捧げられます。この血について、一つ目の殺人と二つ目の贖いと交差点が、キリストです。キリストはご自分の血によって、ただ一度できよめを達成されます(ヘブ 9:)。安易に人を殺したり、いけにえの血を扱ってはならないのは、このためです。新約時代、私たちは聖餐式でキリストの血を飲む交わりに与ります(ヨハ 6:54)。

三つ目はキリストの流された血の責任を、反対に自分に問われることです。キリストが最高の血を流されて救いの道を開かれたように、後進のために、私たちも然るべき時に血を流すことが求められます。「殉教者」=「証人」の意。ステパノ殉教を目撃したサウロのように(使 22:20)、血は種子となります。キリスト者は世の見張り人ゆえ、間違った血を流す者とは争わねばならない。傍観は無責任の罪です。キリストのように血を流せばリバイバルとなります。

6月1日

## 「堅く建てられる王」

Ⅱ サムエル 5:1-25

武安 宏樹 牧師

### ① 全民族集結

対立状態にあったサウル軍とダビデ軍が、満場一致でダビデを王とします。亡きアブネルの道備えもありましたが、ダビデの霊的資質が認められました。かつてサウルは王に指名されるも荷物の中に隠れ、自尊心の低さが窺えます。選ばれた主をあがめるよりも、自分の小ささに囚われてそこから逃れるため、ダビデを潰そうとしたり、間違った礼拝や霊媒師を集めて傷口を拡げました。これに対しダビデは、主に仕えることで健全なセルフイメージを持っていた。彼の自尊心は、自分ではなく主を尊ぶことで形成され、みなに愛されました。主イエスが「神と人々に愛された」(ルカ 2:52)ように、光の中で成長したのです。かつて神権政治の士師制よりも、周辺諸国と同じようにと王制を求めた民は、リーダーシップの強さは求めても、その中身までは大して考えませんでした。優秀なサウル王を手に入れても敗北したのは、霊性まで諸国と同化したから。王と民全体が、イスラエル民族が神の選びの民であることを忘れていました。

### ② ゴー&ストップ

全イスラエルの王として初のペリシテ戦。その勝因は主に伺うことでした。押し寄せてくる敵や、離れていく民に、恐れていけにえを捧げるのではなく、万軍の主が先頭に立って戦われるので、御声をひたすら待ち望む信仰です。サムエルがサウルに断罪した言葉はダビデの正しさも証します(Iサム 15:22)。二回とも同じ谷間に敵が陣取るも、ダビデは二回とも御声を求めています。答は一度目＝ゴー、二度目＝ストップでした。どれくらいの時間をかけて、御声が導かれたのか。どちらも具体的かつ明確な示しをいただいて動くのと、一度目の大勝利の余韻が残る中で、二度目は反対の示しを受け取ったことで、ダビデと主の親密な関係が分かります。民数記 14 章は悪しき不従順二例です。並み居る敵を避けてパスされたボールを、シュートするような連携プレーで、主が一步先を走るのを追いかけてながら、共に勝利を目指して戦っています。王としての基盤を堅固にしたのは、御言葉への聴従による鉄壁の関係でした。主との堅い関係から、日頃の御言葉により、柔軟な適応能力が養われます。そこから「バアル・ペラツィム＝打破の主」、爆発的勝利が証となりました。

6月8日

### 「散らされる王」

創世記 11:1-9

武安 宏樹 牧師

聖霊降臨は恵みの爆発ですが、さばきの爆発こそバベルの塔の出来事です。創造主なる神は「生めよ。ふえよ。」命令を二度発せられました(創 1:28/9:1)。そして三度目こそ、大宣教命令→聖霊降臨の霊的拡散ではないでしょうか。バベルの塔は二度目の地上更新直後に、罪人の叡智を結集した愚行でした。願望形「~しよう。~しよう。」(3~4節)との異様に高いモチベーションは、どこから来るのか。権力者の野望と市民の自衛とが奇妙な一致を見えます。

ついには人類史上いまだかつてない、天まで届く高い塔を建て始めます。そうすれば自分たちの威光を世界に誇り、富と名誉も集中するのではないかと。罪人が集まって考えることは、ことごとく神の御心と反対方向に暴走します。塔の建設自体は悪くありませんが、全地に民を散らす御心を避けるのが問題。その後ろめたさが力や金への偶像礼拝に駆り立て、神への挑戦と化しました。塔を高くする異常な執念の背後には、神のさばきへの恐れもあったでしょう。さばきを免れるためと言っても、信仰によって作り始めた箱舟と正反対です。

天に向けて順調に進捗していたその時、天から神は悠々と降りて来られた。ことばを混乱させ通じなくさせて、彼らのまやかしの一致を解体しました。「我々は降って行って」(共)とあるように、栄光の複数形=三位一体を表して、罪&世&悪魔の悪しき一致を粉碎し、霊的解放で中止を余儀なくさせました。バベル=バビロンは、政治的傲慢・迫害・罪・快楽・迷信・富・滅びを象徴します。ネブカデネザル王が誇った権勢&豪壮な都も、あっけなく滅びます(ダニエル 4:1-19)。終わりの日に「大バビロン」(黙 14:8)と背後の悪魔は、敗北宣告を受けます。

罪に根差した偽りの一致ではなく、聖霊による一致の共同体が教会です。現状の日本はバベルの塔そのものです。金&権力&血を流すために総力結集。70年前の敗戦を反省せず、平和憲法の解釈を変えてまで戦争を志す異様さは、国家権力と偶像礼拝の一致の為せる業です。日本が徐々に沈み始めています。どの政党も宗教も歯止めをかけられないなら、最後の砦こそ教会ではないか。バベルの塔こそ滅びの道と記す聖書を、唯一絶対の規範とする民だからです。悪魔の恫喝に、キリストの復活と教会の不可侵を掲げ我々は抵抗するのです。

6月15日

## 「ダンシング」

II サムエル 6:1-23

武安 宏樹 牧師

ダビデ王が即位早々に着手したのは、長年放置された神の箱の搬入でした。かつてペリシテ中に災厄を引き起こし、サウルが関与しなかったのを見ると、崇りを恐れていたのでしょう。しかしダビデはイスラエルの礼拝拠点再建に、不可欠と確信し、民こぞって周到な準備と熱い賛美をもって箱を迎えます。そこには霊的&事務的に欠けは見出せませんでした、突然悲劇が襲います。

原因はウザの「割り込み」ですが、ダビデの人選ミスもあります(I 歴 15:2)。ウザに気の毒ですが、箱を覗いたベテ・シェメシュ5万人と違い(I サム 6:19)、彼だけ打たれたことに、単なる神のさばきという以上の深い理由を感じます。それは長年放置された寂しさと、政治的な打算では嫌という主の叫びでした。ダビデの考えた中心以上の、「ど真ん中」で臨在したいという愛の動機でした。「3ヵ月」は悔改めと練り直し、箱搬入の確信を強める退修期間となりました。

最初の踊りと出直し後の踊りで、客観的に何か違った訳ではありませんが、ダビデが砕かれたので、賛美を捧げるのに不可欠な「喜び」が与えられました。最初のは一生懸命だけれども、どこか義務的で不自然な賛美を捧げていた。けれども3ヵ月の間に御霊に探られ、主の愛を痛感して、一皮剥けました。かくて賛美が本物となり、聖霊の衝動で踊らずに脱がずに居られなくなった。酒酔いは放蕩ですが、御霊酔いは霊も理性も感情も開花させます(エペ 5:18)。このリバイバルの祝福を解せず蔑んだのが、サウルの娘であるミカルでした。

ダビデは御霊の取り扱いを受けて、砕かれて真の賛美者に成長しました。御霊の満たしが「愛・喜び・寛容…」(ガウ 5:22)の実となり、賛美があふれます。自分の力で賛美を捧げるのではなく、御霊の満たしがなくてはなりません。音楽的な技法以上に、一人一人主を見上げて賛美を喜んでいるかが大事です。賛美は命令です(詩 150:)。割り込みを通して神は賛美を止められたのではなく、自分の思いが十字架につけられた本当の賛美を教えられたのです(ガウ 5:24)。天上の完全な賛美に比べ、私たちの捧げる地上の賛美は不完全に思えますが、両者は直結しています。「新しい歌」(黙 5:)を歌・全楽器・踊りで捧げましょう。

6月22日

### 「神の建てる家」

Ⅱ サムエル 7:1-29

武安 宏樹 牧師

旧約三大契約(アブラハム/シナイ/ダビデ)の一つが登場するところから、本書最重要ならびに旧新約の重心ともいえる箇所です。家を得たダビデは、快適な宮の中でくつろぐ外で、神の箱が粗末な天幕にある違和感を覚えます。相談された預言者ナタンに主の答は、「あなたはわたしのために」建てるのか。宮建築自体は否定せず、後にそれは息子ソロモンが行うと明かされますが、ダビデの一方的な罪意識から出てきた疑問で、少し義務的な信仰と見えます。謙遜と自己卑下が混じり、罪を犯せばサウルのように捨てられるではないか。恐れから自分を駆り立てる信仰からの解放のために、家問題を逆手に取って、ユーモアをもって「主はあなたのために一つの家を造る」と約束されました。結果的にダビデの建築着手は否定されるも(I歴22:8)、ダビデの飢え渴きを、満たして余りあるのが、ダビデを捨てず王家の永続を誓う契約の恵みでした。契約の恵みは「捨てない」ことであって、「罪を罰しない」ことではありません。それは短期的にはバテシェバ事件や人口調査、長期的には捕囚で明らかです。旧約～新約のキリストの救いを仰ぎ見る、契約の恵みに目が開かれました。6章は体験的でしたが、本章の御言葉による約束ははるかに大きな祝福です。

後半はダビデの応答の祈りで、ひれ伏しつつ感謝と賛美が一体となります。楽器と踊りで騒々しく賛美したのは何だったのか。そう言いたくなるほどに、圧倒的な賛美です。杉材の自宅への疑問は、ダビデ家に祝福あれと答を賜り、選びの恵みがどれほどか知って、家は目に見えるものだけでないと悟ります。宮建築もいざ完成してソロモンが墮落し始めるのを見ると、難しいものです。形だけの礼拝になったり(イザ66:)、意気阻喪して建築を挫折したり(ハガ1:)、宮建築とは信仰と一体です。ダビデの場合は信仰によって宮建設を模索し、その思いは受け止められつつも、新たな家の視点を与えられ正されたのです。会堂建築も一大プロジェクトですが、教会における家とは何かと思えます。ともに年2回の伝道会に協力するのも、霊的な部分で家の建て上げの好例で、そこから神の家族が増し加えられ、よき交わりとなれば素晴らしいことです。交わりが形式でなく、キリストの自由さがあふれるものとなりますように。

6月29日

### 「祝福から勝利へ」

Ⅱ サムエル 8:1-18

武安 宏樹 牧師

前章ではダビデ契約を通して、イスラエル全家の祝福が約束されましたが、「もし彼が罪を犯すときは」(7:14)とあるように、懲らしめも含まれています。本章ではエルサレム起点に六方向に勢力を拡大する、繁栄が記されています。これらの業績は時間もかかっており、もっと紙面を割いてもよいはずですが、淡々した記述は王の偉大さよりも、あくまで神の主権にある王を強調します。歴史的には「ユーフラテス川まで」(創 15:18)とはアブラハムへの約束でした。その信仰と契約は、アブラハム→モーセ→ダビデと重層的になっています。先達の名前こそ登場しませんが、謙遜なダビデはたえず意識したでしょう。

ダビデは華々しい勝利の背後で、どれほど自分が隠される訓練を受けたか。サウルより高い評価を受けた時でさえ、時が来るまで遜ることを学びました。本書はこれ以降 10 章と 12 章の最後で、華々しい勝利が記されている以外は、僅かな気の緩みから罪を犯し、それがもとで家族や民がさばきを受けたり、碎かれる試練ばかりで、契約の祝福とはこのようなものかと驚かされますが、先人も同じ道を辿りました(ハブ 11:)。苦しみばかり数えるならば、信仰とは、割に合わないものです。「祝福＝勝利」の公式は半分正解で、半分誤りです。1勝利する背後で9失敗します。けれども手痛い失敗で初めて学ばされます。一つ目は主との契約関係がなければ、自分では何もできないということです。二つ目は己の悟りは当てにならず、御言葉の知恵に依り頼むということです。三つ目は先達もみな碎かれて敗北者でなく、勝利者の確信を得たことです。

「繁栄の神学」で急成長した教会の牧師が、金や異性やパワハラで追われるという話をよく耳にします。苦しみの信仰生活よりも、信仰によって勝利で、何が悪いと言われます。もっともですが、強調しすぎると現世利益の宗教に墮落してしまいます。それがまさにラオデキヤ教会で はなかったか(黙 3:17)。神主権から逸脱して人間的祝福を謳うものの、生ぬるい偶像礼拝者の姿です。とこしえの契約を結んだダビデの、平坦でない歩みがこれから展開されます。ダビデ同様、私たちが打ち碎かれて得られた勝利がどれくらいあるでしょう。

7月6日

## 「契約の『お』恵み」

Ⅱ サムエル 9:1-13

武安 宏樹 牧師

7章は分不相応の恵みの契約内容を、8章はその結果として国力の発展を、そして9章は「恵み＝力」という見方からすると意外な、王の憐れみを見ます。王子ヨナタンは若きダビデとの別離に際し結んだ契約に、「あなたの恵み」を、求めました(Ⅰサム 20:15)。それは後のダビデ王家繁栄を見越した預言でした。生前の約束から、わざわざ対立関係にある前王家の親族に施しをするという、義理堅いダビデに、障害者である子メフィボシエテが存命との報を受けて、人の助けなしに外出もできぬ彼に、ダビデ王家の一員としたいと申し出ます。

「何で俺？」光栄とか以前に、恵みを施される筋合もないのが本音でしょう。こうして前王朝の親族を陣営に引き込むという、うがった見方もありますが、ダビデは純粋に契約への忠実を通して、親友にお返ししたかったのでしょう。サウルに「死んだ犬」と名乗ったダビデが、王の孫に「死んだ犬」と名乗られる。「このしもべが何者だというので～」は、「私がいったい何者であり」(7:18)の、恵みの裏返しです。国力の発展も恵みなら、約束に忠実な憐れみも恵みです。イスラエルの王として「一つの家」を建て上げるために、どちらも不可欠です。

足なえは美しの門で施しを求める、恵まれない者として登場します(使 3:)。キリストの御名で立ち上がる彼らへの恵みに、「力」「あわれみ」が含まれますメフィボシエテはいやされたとは書いてありませんが、共通して言えるのは、「障害者＝恵まれない者」として、人手によらなければ生活できないという、後向きな人生から、神との出会いで「自立」し「恵まれた人」になったことです。もちろん自立できた背景には、神との出会いを受け入れる信仰もありました。自力では恵みの食卓に集えないことを、彼は私たちの幾倍も知っていました。

「恵み」という莫大な富を相続する者。食卓に連なる者。契約の血を飲む者。それがメフィボシエテであり、キリスト者です。恵まれぬ者が、恵まれた。ダビデは義理や人情でなく、恵みの契約の豊かさを慈善を通して証します。たとえ不具者であっても、憚ることなく家族の一員として食卓に迎えられた。恵みの自立が、人間の側の値うちによるのではなく、神の選びによるからです。

7月13日

### 「若い日に創造者を」

伝道者の書 12:1-8

武安 宏樹 牧師

「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。」を洗礼式の祝辞とします。若い日に創造主を知るなら、それだけ残りの人生を捧げなければなりません。神を熱心に求め、御言葉に従うようお願い、聖霊の力で生き、神の栄光のため時間と賜物を捧げることです。実はこの生き方は「空の空」と裏表の関係です。

「色即是空」とあるように、仏教の無常観は「空」を積極的に会得することで、世の中の煩悩に振り回されない生き方を志向しますが、聖書の「空」自体には、何の意義もありません。聖書の教えは有神論ですから、創造主を知ることで、私たちの人生に神の恵みが与えられることで、人生の空しさは存在しません。けれども私たちは本当に、「喜び楽しむ」(3:12)人生を受けているでしょうか。空しさ&弱さを打破すべく修行に励む人が、実は多いのではないのでしょうか。悔い改めるべきは各々の罪以前に、恵みを拒絶する頑なさだと思わされます。

そうは言っても私たちは生存競争の中で、人の評価を恐れて生きています。恵みや自由よりも束縛や自己愛、人間の尊厳よりも優勝劣敗を選ぶ世の中で、誰もが漠然と世の終わりの近さを覚えつつ、無力感と空虚感が漂っています。世の流れ&罪の支配&背後の悪魔が一体となって、世界を拘束しています。キリスト者も神が見えなくなる戦いの中に置かれています。にもかかわらず、誰にも奪えない特権。それは地上の富でなく、創造主の栄光を喜ぶ人生です。世の中がどんなに荒廃しても、私たちが敗北感に苛まれても、選びと祝福は変わらない。世の「空の空」を打破するため、私たちは生かされているのです。

創造主信仰とは何か。天地創造の初めに創造主のみが世界を治めていた。後に人間の墮落に乗じてサタンは支配権を主張し、背後で糸を引きますが、パウロはキリストにあって、世界は霊的二層構造だと語ります(エペ 1:20-21)。サタンの支配は一時的で、その終焉が間近であることを覚えて身震います。激しい戦いの時代の中で、私たちは再臨を待ち望み、創造主の最終的勝利を確信して生活するなら、小手先の律法主義で一喜一憂している場合ではない。創造主を信じて、誰の権威で生きるか明確な人は、その存在自体が貴重です。

7月20日

## 「真実のために戦う」

Ⅱ サムエル 10:1-19

武安 宏樹 牧師

本章は、前章とともに原語「ヘセド＝恵み/真実」が用いられている点で、密接な関係があります。メフィボシェテの素直さに対して、アモン人の拒絶。恵みは主との信頼関係を通して注がれます。両者の反応の違いから学びます。

与える業で恵まれるのは、受ける方以上に与える方です(ルカ 6:38/Ⅱコリ 9:7)。前王家を恵んで祝福されたので、今度は周辺諸国との友好関係構築のために、ダビデは弔意を伝えます。けれどもアモン人は恩を仇で返す非礼を働きます。昔から彼らはイスラエルと親族関係にありながら、足を引っ張ってきました。原因として幼児を犠牲にするミルコム信仰が、墮落をもたらしたのでしょうか。

いずれにしてもアモン人には、主の恵みや善意は届かず、遮断されました。偶像礼拝の霊性が、善意を受け取れない疑い・恐れ・頑なな心となりました。恩を仇で返したアモン人はアラム諸国同盟まで巻き込んで、戦争に備えます。数で圧倒的にイスラエル不利でしたが、侮辱に引き下がるわけにはいきません。百戦錬磨のヨアブは数でなく少数精鋭で作戦を練り、信仰により勝利します。「救いは主による」(箴 21:31)とはいえ奇蹟頼みでなく、最善の努力はします。自分たちのためではなく、主の御心が行われるために、一丸となって戦った。選ばれた者としての士気&信仰による勇気&祈りで注がれる知恵に満ちて、対する偶像礼拝国家群はうわべは強く見えて、萎えて何もできませんでした。ダビデは彼らを軍門に下らせて、政治&経済&軍事の覇権を獲得しました。

だからダビデが恵みを施したことは、間違いではなかったとわかります。すんなり受け取ったら平和に済んだことが、拒絶で力比べを余儀なくされる。主はご自分の民に味方して、敵をなぎ倒す恐ろしい神だと諸国に知らしめる。それだけだと独善に陥りますが、もう一つの恐ろしさは罪のさばきを通して、ご自分の民を倒すのも辞さないこと。要求されるのは悔い改めの柔軟性です。次章がそうですが、その厳しさの彼方にソロモン誕生の恵みも用意されます。大事なことは、無限の神の恵みを小さな人間がとらえざるを得ないことです。すぐ善悪の判断を急ぐ迷信が砕かれるために、勝利もさばきも与えられます。行い以前に私たちは存在的に、主との契約の恵みの中に生かされています。

7月27日

### 「隠蔽工作」

Ⅱ サムエル 11:1-27

武安 宏樹 牧師

有名なダビデとバテ・シェバの姦淫の場面で、「義人はいない」(ロマ 3:10)と納得させられます。何が悪かったのか、何処から堕ちたのか、見ていきます。本章の方向性に重要な記述が「しかしダビデはエルサレムにとどまっていた」つまり真冬に部下が命がけで敵と戦う一方、王は宮で安逸を貪っていました。ここで「とどまっていた」善し悪しよりも、孤独の危険性に着目させられます。神がアダムに助け手を約束されたのは、知識の実の禁令直後でした(創 2:18)。エバが実を直視してしまったのと同様に、ダビデの目にも裸体が飛び込んで、かくして、「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると、死を生み」(ヤコ 1:15)ました。一人でいると目の欲や心に浮かぶ悪しき誘惑に苛まれ、克服は至難の業です。大事なものは信仰により勝利はできますが、戦い自体はなくなるということですが。

本章で罪の一部始終が語られます。王の命令を拒絶する選択肢は皆無です。逆にダビデは権力行使と性欲の誘惑に屈して、人妻の貞操を踏みにじります。「ほふり場に引かれる牛のように」(箴 7:22)、死の獄から脱出不能に陥ります。立派な第7&10戒違反であり(出 20:)、両者共に死罪に値します(レビ 20:10)。「魔が差した」とか「出来心」などと、言い訳で済まされる話ではありません。罪の邪悪さは明るみに出さずを避け、闇に葬り去ろうとする点にあります。高尚な祈りを捧げた者が(7)、罪をお祓いで処理してくれる他の神々を求め、あらゆる隠蔽工作に手を尽くす。皮肉なことに外国人ながら忠実なウリヤは、「神の箱」を理由に帰宅を辞退し、やむなくヨアブを共犯に戦死に仕立てます。

前夫を失い悲嘆に暮れるバテ・シェバを妻に迎え、王は幕引きを図ります。工作は功を奏し誰も告発不能に見えましたが、本章最後で破綻を予告します。「みこころをそこなつた」=「神の目に悪かった」意。悪魔の策略完成の直前に、「しかし～」と次章での暗やみを切り裂く、一筋の御言葉の光を期待させます。心の隙から忍びこんだ罪は、振り返れば第6～10戒の全違反となりました。十戒の後半(社会的規定)は、ひいては前半(宗教的規定)から生じるものです。心の王座に主以外の神々が侵入して、おびたしい罪を犯してしまいました。私たちの目の欲を制するのは、神の眼差しでしかありません(詩 139:1)。罪性を恐れつつ、「御子のご支配の中に」(コロ 1:13)あることを感謝しましょう。

8月3日

### 「悔い改めの光」

Ⅱ サムエル 12:1-31

武安 宏樹 牧師

完全犯罪に見えた姦淫の罪に、神はナタンを遣わして罪を指摘しました。同じ断罪でも最大限の言い訳を弄し、王位剥奪を 示された途端に罪を認めたサウルと、すぐに認めたダビデと対照的です。ナタンは最初から断罪でなく、例話を用います。金持ちの非情さを痛感させられダビデ は義憤に燃えますが、「あなたがその男です」と皮肉にも、出した判決が自らの死刑宣告となります。

サウルと異なり、ダビデは「主に対して」と人格的關係から罪と認めました。赦しがサウル＝×でダビデ＝○だったのは、アウグスティヌス曰く心の違い。神に心開くことができない人は、残念ながら悪霊と共に滅びを刈り取ります。ダビデは正直に真正面から罪を認めたことで、赦しを得ることができました。契約は無効になるか。自分は捨てられるか。恐れの中で詩 51 篇を読みます。「神へのいけにえは、砕かれたたましい、砕かれた悔いた心。神よ、あなたは、それをさげすまれません。」(詩 51:17)彼は深い罪深さの打ち砕きを願います。

ダビデの罪は赦されましたが、その結果についてはダビデが刈り取ります。悲しみはバテシェバ・ウリヤー族・王宮全体・イスラエル全体に波及します。罪の結果を頑ななサウルは恐れ、ダビデは悔い改め罪の彼方に御霊による、再スタートを志向します。どれほど私たちは悔い改めにより罪が赦されて、聖霊の祝福を受け難題を越えようとしたでしょうか。我を張るのはNGです。

「悔い改めとは我々の生が神に向き変わることであって、この移り変わりは神へのまじり気のない、厳粛な恐れから生じるものである。これは、われわれの肉とわれわれの古き人々に死ぬことと、御霊によって新しく生きる ことから」とカルヴァンは言います。どれほど私たちには悔い改めによって罪を赦され、解放されて、聖霊の祝福を受けて難題を乗り越えてきたでしょう。つまらぬ肉の力に鞭打ち、我を張って生きるのは神の愛を拒むのではないのでしょうか。

8月10日

### 「欲情と復讐①」

Ⅱ サムエル 13:1-22

武安 宏樹 牧師

ダビデは犯した罪の指摘を素直に認めて、死刑や王位剥奪は免れましたが、子の死と罪から生じる結果を自ら招きます。王 ならではの刈り取りの厳しさ。罪の邪悪さは自分だけに留まらず、家族や部下など関係者に伝染することで、アダムの罪が子孫に拡がる如く、ダビデの姦淫は子 の近親相姦に発展します。神が全能なら何故罪の拡散を防げないのかと、疑問を持つ向きもありますが、罪の恐ろしさを痛感しなければ、十字架の贖いの 有り難さも分かりません。

ダビデ家の男子は全て腹違いで、タマルは三男アブシャロムと母が同じ。アブシャロムには大事な実妹、長男アムノンには 異母妹という微妙な関係。アムノンは王位継承権を有する長子ですが、美人の妹に恋煩いをしてしまい、禁断の恋ゆえの苦しみで元気が失せ、食が細り、鬱々と 周囲を心配させます。知恵者ヨナダブはアムノンを励ますため、妹に接触する方策を伝授します。「ハート形のパン」からアムノンの妄想は膨らみ、目から体全 体に侵食します。ヨブは「目と契約を結んだ」(ヨブ 31:1)と、目の誘惑からのきよめに努めます。加えて結婚関係にない男女の二人きりは、誘惑の発生 しやすい環境でした。罪の恐ろしさは、心の隙間に悪魔が入り込んで、制御不能となることです。私たちは罪を犯しやすい状況を除去し、悪魔の働く芽を摘むことが大事です。そんな兄の葛藤 などつゆ知らず、父に命じられるまま妹はパンを運びます。

結果は近親相姦。それも強姦という最悪の結末。立派な律法違反でした。妹は知恵と配慮をもって説得を試みるも、野獣と 化した兄の前で無駄でした。さらに悪いことにポイ捨て。犬が糞し後ろ足で砂かけて隠そうとするように、神の前に隠せる証拠も消せる過去もないのに、証拠隠 滅に努める愚の骨頂。父ダビデもウリヤ を戦死させて隠滅を図る。罪のDNAは恐ろしいものです。何とひどいことをと憤る私たちも、目から入り→ 罪の奴隷→証拠隠滅を図る、一連の流れは何ら変わりません。罪は行うかどうかではなく性質の問題です。パウロは自分のこととして罪深さを嘆きつつ、キリストの御霊により初めて、悪循環から解放されると説きます(ロマ 7:)。悔い改めは免罪符ではありません。罪の結果は残っても深い部分が移植されるならば、 過去も乗り越えられます。

8月17日

## 「欲情と復讐②」

Ⅱ サムエル 13:23-39

武安 宏樹 牧師

ダビデは妹を犯した長子アムノンに激怒しただけで、何もしませんでした。子に甘いのと、自分の過ちをなぞるような事件なので厳罰を与えられません。アブシャロムは着々と敵を取る機会を窺い、2年後の羊の毛の刈り取りの日、宴会を主催して、王の代理で出席したアムノンの殺害計画を実行しました。父が躊躇したさばきの代行でしたが、介入しなければならない骨肉の争いに、ダビデは傍観者と化し、腑抜け&腰抜けの無能な信仰者の醜態を晒しました。「主の敵に大いに侮りの心を起こさせた」(12:14)とは、罪の影響力の甚大さを、痛感する無力感から失望感、そして契約を与えられた主を見上げることさえ、恐れてしまう臆病の霊に陥りかけている、ダビデの心の状態を表しています。

死んだのがアムノンのみと判明しても、ダビデの苦悩は止みませんでした。罪を認めてその影響力を知るのも必要ですが、行き過ぎると病的になります。二人の息子と自分の三角関係の中で、悲しみ&怒り&あきらめが交錯します。その背後には誰にも弁護されずに、悲しみに沈んだままのタマルがいます。「わたしが、あなたのために家を建てる」(7:27)御言葉の約束は何だったのか。神ご自身へ疑念も怒りも生ぜずとも、彼がダビデの家の絵を描いたとしたら、金も気力もなく、ヒビ割れて今にも崩れそうな悲惨な宮となることでしょう。「今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない」(12:10)が彼にのしかかって、若かりし頃にあなたの宮を建てたいなど、僭越極まりない発言をしたものと、良く言えば砕かれ、悪く言えば傷ついて、ダビデの心は弱くなっていました。

しかし「敵を喜ばせることはされなかった」(詩 30:1)と記されているように、数々の桎梏から解放されるまでには、まだ苦しみを経なければなりません。「叫び求めると、いやされ」「朝明けには喜びの叫びがある」恵みを味わいます。無力と高慢に揺さぶられ、全て自分が悪いのだと塞ぎ込み、敵にあざけられ、初めてダビデは自分ではなく、主が家を建ててくださる意味を知りました。罪の荒波に打ちのめされ、うずくまる中にも神の御手があることを知ります。神への情熱が強すぎたのか。だからこそ愛のムチがあったのです(ヤコ 1:12)。

8月24日

「自分の全部をささげた貧しいやもめ」

マルコ 12:41-44

入川 達夫 師

レプタ銅貨2つを献金した貧しいやもめの信仰と献身を通して教えられよう。彼女は主への信仰をもって生活費の全部を献 げた。このような彼女の信仰はどこから来るのだろうか？ 彼女は夫に先立たれ自分を養って支えてくれる主人はいない。しかし、彼女は頼みとする主人を失ったことによって、真の養い手である主を知ったのではないだろうか。これは逆説的な言い方であるが、人は頼みとしてきたもの失うことによって、むしろ自分を養い導いてくださっているのは万物の創造主、全能の神ご自身であることを知るのではないか。だから彼女の献金は、自分のすべてを完全に支え導いてくださっている生ける神に彼女の自分の全部を献げる信仰の表れであり、主への献身なのである。

一方、他の人たちは有り余る中から一部を献金として献げていた(44節)。これはおよそ「神の国と神の義を第一義とする」信仰と献身の姿勢にはほど遠いものである。しかも、金持たちが「大金を投げ入れていた(41節)」とあるが、これは「沢山の銅貨を投げ入れ続けていた」という意味である。つまり彼らは沢山の銅貨を長時間かけて献金箱に注ぎ込んでいた訳で、それは神のことを思って献げているというよりも、自分がいかに 信仰深い人間かを人々に見せている行為に過ぎない。これも神への信仰と献身の姿勢にはほど遠いものである。

私達のクリスチャン生活は全てが誰に覚えられるが問われる。私達のあらゆる行為は天のお父様に覚えられなければ意味はない。私達は今一度、この貧しいやもめの信仰と献身の姿勢から自分のクリスチャンとしてのあり方を教えられたい。

8月31日

## 「媚びる王」

Ⅱ サムエル 14:1-33

武安 宏樹 牧師

ダビデはアブシャロムの処遇を巡り、王と父の役割の相克で苦しみます。この状況を打開しようと動いたのが、忠実かつ知恵に富む部下ヨアブでした。一人の女に演技をさせ判決を下させることで、父子関係修復の言質を取らせ、追放状態の解消を図る。弱者に優しいダビデの性格を熟知するゆえの作戦は、まんまと当たります。かつてナタンの例話に感情的に断罪したダビデでなく、静かに女の訴えに耳を傾け、ぶしつけな非難に激することなく、熟考します。ついにはアブシャロムを殺さないこと、呼び戻すことを誓わせるに至ります。

その結果ダビデはアブシャロムに寛容を示して、帰還命令を出しましたが、自分の近くに置こうとせず、面会も許さず、自宅軟禁状態が2年間続きます。これではヨアブの意向を表面的に汲んでも、アブシャロムには飼い殺しです。萎えたヨアブの畑に、期待外れのアブシャロムが業を煮やして火を放ちます。ダビデは一体何を考えていたのか。芝居に洪々従った訳ではないでしょうが、すぐに面会して謝罪を受け入れるとか、逆に自分が悪かったと謝罪するとか、ケリをつけられるほどの心の整理は未だ出来ていない。よって妥協案として、ヨアブの労も受け取って、アブシャロムに帰還を許して名誉回復は図るも、兄殺しのようなリーダーシップを発揮して、野放図に動き回ると厄介である。だから「どっちつかず」にせざるを得ず、それこそがダビデの心の内側でした。

「あなたさまは、神使いのような知恵があり」(20節)何を言っているのか。空気の読めない、いや不気味な励ましに満ちた女の言葉がダビデに響きます。「アムノンだけが死んだ」(13:33)ヨナダブの言葉も不気味な示唆に富みます。いっそアブシャロムも死ねば。彼の帰還で厄介になる恐れは次章で当たります。ダビデも追い詰められますが、アブシャロムも病的で自暴自棄に陥ります。三者ともに重苦しい膠着状態で、不満・逃げ・失望・赦さない心が交錯します。面白いのはヨアブの作戦・女の口・アブシャロムの直談判で、場面は進むこと。背後に御手があるからです。ここに罪の影響の大きさを見ることができます。罪単体で赦しを得ても、弱さについては本人がそれを受け入れるまで聖化に時間がかかります。接吻は偽りの和解で、場面はさらに彼らを追い詰めます。

9月7日

## 「神のことば」

Ⅱ ペテロ 1:20-21

中村 孝 宣教師

### ①ビニグニ村での聖書翻訳の実態

1988年パプア・ニューギニアに聖書翻訳(ウィクリフ)の宣教師として派遣されました。そして、1989年ビニグニ村でマイワ語聖書翻訳を開始しました。新約聖書翻訳が終わり、2012年4月に献書式が行われました。その時にマイワ語を使う人の予想を超えた予約で印刷された聖書が売り切れしました。そのため、翌2013年に増刷をしました。

2014年2月に讃美歌集が完成しました。この時も予約でなくなり、今後、増刷を行う予定です。

自分たちのことばで聖書を読みたいと願っている人が多くいることを実感しました。

2012年の調査で新旧約聖書、新約聖書のみ、翻訳中などを含み、訳されている聖書の言語は4,873語。有名な文学作品でさえ多くて200、300くらいにすぎません。聖書はどんな書物よりもはるかに多く翻訳されています。

### ②神のことば

Ⅱペテロ1:20には神様の遺言が書かれています。すなわち聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。例えば、処女降誕、復活、再臨といった信じがたいことも事実としてありのままを受け入れるべきです。その根拠が21節に書かれています。聖書のことばは聖霊によって動かされたことばです。そしてその出どころは神様です。パウロもペテロも偽の教えが出てくるけれど、聖書の教えにしっかりと立っている様に忠告しています。人間のことばと神様のことばは比較はできません。世界のベストセラーの聖書には神様の愛が詰まっています。聖書が今、日本語で読めるということは大きな恵みです。

9月14日

### 「心を盗む者」

Ⅱ サムエル 15:1-37

武安 宏樹 牧師

アブシャロムは口づけをゴーサインと受け止め、クーデターに着手します。彼は美男子で(14:25)、リーダーシップもあり(13:23)、魅力的な人でしたが、その反面、長兄の陰に隠れて屈折した負のエネルギーが満ちていたようです。「自分のため」権力基盤の整備を図り、王への不満につけ込んで民衆を扇動し、偽預言者の手法によって(1ヨハ 4:5)、ついに世論を味方につけるに至ります。「心を盗む＝自分のものにする」のは、神に常に敵意を燃やす悪魔の働きです。そんな抜け目ない彼の記念の地へブロン行を、ダビデはあっさり許可します。

クーデターは常に秘密裏に行われます。人心掌握で成功に見えましたが、後付けで形ばかりのいけにえ奉獻が、彼の信仰の杜撰さを物語ります(12節)。全ての民の心を盗むことができたようで、その心は扇動された群集心理や、側近の孤独感に乗じたものに過ぎず、実際はうわべだけの掌握に過ぎません。心の深みまで支配しうるのは神の領域であることを、彼は甘く見ていました。神の教会にも混乱はよくありますが、人の集まり以上に神の守りがあります。ダビデは一旦退却を余儀なくされますが、そんな落武者に心から忠誠を尽す、外国人イタイや祭司ツァドク&エブヤタルの献身的な信仰は、印象的です。彼らは神の箱の所在以上に、主の臨在と真実を求めて、一致していました。

ダビデは泣きながら裸足で山を登り、自分の罪の刈り取りの苦悶と哀悼を表します。砕きに砕かれて、足を踏みしめる山の頂に一筋の光明が差します。謙遜にあわれみを訴える祈りに(31節)、神は必ず答えられます(詩 51:17)。それはアヒトフェル以上の知恵を備えた、策士フシャイが与えられたことで、この山頂から、一時成功と見えたクーデターの化けの皮が剥がされ始めます。忠誠心に富む少数は、雰囲気だけであつまった大勢よりも優っていることが、今日の箇所からわかります。アブシャロムは人心は盗めても、その奥にある霊的な希望までは盗めなかった。世の惑わしは激しくとも、悪魔は私たちの内にある救いまで奪うことはできず、詩3篇は勝利の希望を雄弁に語ります。

9月21日

## 「聖霊に遣わされて」

使徒 13:1-4

田村 昭二 師

この箇所は、世界宣教のきっかけを作った、アンテオケの教会での第一回世界宣教派遣式の様子です。ここから祝福される教会について学びます。

### ① 生きた信仰者の群れ

アンテオケ教会の人材はキプロス出身者、ニゲル人(黒人)、クレネ人、タルソ出身者などで、12使徒が一人も含まれていません。しかし、彼らの信仰は純粋なものです。礼拝をまもり、断食をし、祈りの人々でした。この教会はこのような信仰の群れに支えられていました。

### ② 聖霊に導かれる群れ

教会は最初からバルナバとパウロを宣教師として決めていたわけではありません。断食と祈りで聖霊の導きを求めていた中で示され、そして、やむなく教会は柱であるこのふたりを送り出しました。ある方はこれを「アンテオケ教会がバルナバとパウロを教会内に閉じ込めていたのを開放して、主の奉仕に解き放つただけ」と言います聖霊がこの群れを導いて下さったのです。

### ③ 聖霊に遣わされて生きる醍醐味

このふたりは聖霊に遣わされることになりましたが、よく見ると、自然になるべくしてなったことがわかります。いわば彼らの郷里伝道です。聖霊が遣わすからといって、劇的で、みんなを驚かすとは限りません。あとで、すごい！と言わせることがしばしばあります。この小さな郷里伝道の一步がイエス様の世界宣教命令の実現につながりました。

同様に私たちも聖霊により教会から家庭の日常生活へ送り出されています。小さな宣教師として働きをしたいものです。

9月28日

### 「心を盗まれる者」

Ⅱ サムエル 16:1-23

武安 宏樹 牧師

#### ① 好意と悪意に対するダビデの反応(1～14節)

都落ちしたダビデ一行は神の箱を戻し、行く末を御手に委ねて泣きながら山を上ります。フシャイとの出会いは、「主の山に備えあり」の心境でしょう。極限状態で答えが与えられ、ホッとして下山すると、疲労と空腹を覚えた。そこへツィバから肉の糧が提供され、メフィボシエテへの信用と引き換えに、ダビデは即決してしまいました。これはエサウ同様の失敗と言わざるを得ません。次に登場するのはゲラの子シムイの、聞くに堪えない「ヘイトスピーチ」です。腹は満たされたとはいえ、霊的には「？」がダビデの心境でしたが、ここでは、反撃も無視もせず、「血まみれの男」「よこしまな者」をそのまま認めます。敵の侮りも主からと謙虚に受け止めたのは、主の憐れみに信頼したからです。

#### ② 賛辞と誘惑に対するアブシャロムの反応(15～23節)

無血クーデターに成功したアブシャロムが、意気揚々と都入りする歓迎の行列の中に、寝返ると予想もなかった「ダビデの友」フシャイの姿があった。多少の不審さを覚えつつ、心情的な「万歳万歳」と知的な三段論法に説得され、アヒトフェルに加えフシャイまでが脇を固める、「鬼に金棒」感で高揚します。何とも皮肉なことに、全イスラエルの心を盗むことに成功したように見えて、逆にフシャイから完全に心を盗まれ、アヒトフェルは後に死に追いやられ、徐々に追い詰められていきます。そんな策略もつゆ知らず、次の策を進めて、アヒトフェルの助言通り父の残した側室を自分の妻とし、地固めを図ります。けれどもこれはナタンの預言通りで(12:11)、皮肉なことにアムノン同様の罪を犯すことで、王として不適格であることを、自ら証明してしまいました。

心を「盗む者」「盗まれる者」も、実は紙一重でした。罵詈雑言を浴びつつも、粛々と罰を受け止め、罪の赦しと神の憐れみに信頼しへりくだるダビデの姿。人間的な地固めを行い上り詰めたようで、早くも転落を始めるアブシャロム。ダビデには神の箱はなくとも臨在はあれど、アブシャロムはその反対でした。かつては悪魔に従い罪を犯し、後に責められても、悔い改めとへりくだりで、神は恵みを授けられます。どちらが勝ち組なのかは単純に決められません。自らの十字架を負い、悲しみつつ勝利するダビデの姿に、キリストを見ます。

10月5日

## 「はかりごとの上に」

Ⅱ サムエル 17:1-29

武安 宏樹 牧師

アブシャロムのクーデターに際して、部下として寝返ったアヒトフェルと、寝返ったように見せかけて、巧みな芝居を行うフシャイとの知恵競争です。アヒトフェル案は順当な「速攻&夜討ち」戦術で、これで勝てたはずですが、正しすぎて鬱陶しい部下に、全部お膳立てされて戦うことへの反感からか、わざわざセカンドオピニオンとして、議席にいないフシャイも呼び出します。前章の「万歳万歳」「三段論法」でどこまで揺さぶれるか予行演習済でしたが、どことなく不安なアブシャロムの心の隙をついて、ダビデの勇猛さを主張し、総力戦の必要を訴え、そのためにアブシャロム自ら総指揮を執るべきだと、理知的なアヒトフェル案と対極の、感情的に訴えるアプローチで提案します。

この案はアブシャロムだけでなく、イスラエル庶民の心にヒットしました。だからと言ってアヒトフェル案より、出来が優れていた訳ではありませんが、そこに主の御手が働かれ(14節)、ダビデの涙の祈りは答えられ(15:30-31)、困難な知恵競争に勝利しました。忍者のようなヨナタンとアヒマツの動き、モーセ出生時の助産婦やサウル追跡時のミカルを彷彿とする婦人の機転で、逃亡への時間稼ぎ作戦は功を奏し、ダビデ軍は無事ヨルダン川を渡ります。一方で優秀で真面目なアヒトフェルは、傷心と抗議の念をこめて縊死します。王への不満という負の要素だけで結託し、自分の尊重される道を選んだ結果、人殺しである悪魔の餌食となる。神に背を向ける者の最期に戦慄を覚えます。

追われるダビデ軍、追うアブシャロム軍。何故か前者は明るく後者は暗い。マハナインまで逃れたダビデ軍は、敵軍駐留のヨルダン川から離れたことで、態勢を建て直すことが可能となり、かつてサウルから逃れる時に知り合った、各地の資産家から心温まる生活支援物資の数々を贈られて、力づけられます。泣きながら山を上り祈ったダビデ軍に、ここまでだいぶ光が射してきました。「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る」(箴 19:21) 人間的に完璧に見えるはかりごとの上に、御手があります。心の深い動機に、悔い改めと祝福のチャレンジを受け取るか否かで、その差は歴然となります。

10月12日

「神があがめられますように」

詩篇 57:1-11

畑田 祐二 師

序. このダビデ詩篇はサウルからの逃亡期間中に歌われたものです。今日は苦難の中にあつたダビデの祈りから信仰とは何かを考えます。

I. あわれみを請うダビデ(1 節)

祈りは神への賛美から。主イエスが「主の祈り」で教えてくださいました。それと比べれば型破りな祈りです。しかし、この時のダビデはそれができないほど追い詰められていました。残忍な追手に囲まれ、うなだれていたのです。

(4-6 節 b)

II. いと高き神を見上げるダビデ(2-3 節)

しかし、ダビデは希望を告白します。いと高き神を見上げ、恵みとまことを送って救ってくださると信頼するのです。目の前の見える現実にはなく神の善性に目を向けるのです。

III. ダビデの究極の願い(5 節)

5 節の告白にはダビデの信仰が如実に表れています。ダビデの願いの中心は「神があがめられること」にあつたのです。この苦境の中にあつてもです。

IV. 思い煩いからの解放(6 節 c-10 節)

心の中心が神に向いている祈りは聞かれる祈りです。この祈りを境にダビデを取り巻く状況が変化していきます。祈りは人に小さな恵みにも気付く霊的洞察力を与えます。ダビデは小さな出来事に大いに励まされ、思い煩いから解放され、確信と感謝と賛美にあふれていきます。

結. ダビデにないもの、2つ

自己憐憫と復讐心です。冒頭のあわれみの嘆願は、信頼ゆえの直訴です。また、ダビデは窮鼠でしたが猫を噛みませんでした。代わりに、ただ一心に神を見上げました。時が良くても悪くても、最善をなして下さる神を信じ仰ぎました。これが信仰です。

10月19日

## 「悲報に接する王」

Ⅱ サムエル 18:1-33

武安 宏樹 牧師

アヒトフェルとの知恵競争でフシャイが勝利した時点で、アブシャロムのクーデターは事実上失敗に終わったも同然ですが、ダビデにとっての問題は、政治的争いではなく、王と父の立場の狭間で引き裂かれる苦悩にありました。

忠実な3将軍を中心に再編したダビデ軍は、烏合の衆のアブシャロム軍を圧倒するも、本心では自ら参戦を願い、父子の和解の機会を探ります(2節)。それが適わないと「私に免じて」手加減せよと、戦いを公私混同します(5節)。これではヨアブに責められるのも当然(19)。彼は血も涙もないのではなく、立てられた王と王国の将来のためを思い、アブシャロムにとどめを刺します。「天と地の間に残された」無様で孤独で宙ぶらりんな、浮かばれない最期です。

果して王国の将来のため殺すべきか、王の命令どおり生かしておくべきか。真っ二つに意見が分かれたでしょう(11-12節)。ヨアブさえ王の心境を慮り、直後は報告を躊躇します。結果的にクシュ人を通して凶報は伝えられますが、聞いたダビデは報告者にもヨアブにも怒りをぶつせず、愛息の名を連呼して、号泣しながら、子に及んだ罪の刈り取りを自分のこととして受け止めました。王として恥も外聞もなく、理性と感情と霊が分裂した心痛を叫びます(33節)。

これが罪の悲惨な刈り取りです。神は悔い改める者には赦しを与えますが、だからといって罪を薄めはしません。私たちは身内の不祥事をかばいますが、それは聖書の教えるところではありません。罪は罪として律法と戒規に従い、処分を受けた後に再スタートを切るべきで、隠蔽は古来から悪魔の業です。けれども神は正義の方であると同時に、憐れみの方であることを想起します。ダビデの悲痛な叫びは神のさばきに対する絶望感かという、そうではない。受け止めたくない事実を受け止める中で、感わしや偽りの慰めや罪悪感が、彼を襲います。が、試練の渦中でキリストこそが全人類の罪の贖いとなること、そこに真の解放があることを、分裂した叫びの中で同時に見出していきます。「罪から来る報酬は死」ですが、神はキリスト者に恵みを備えます(ロマ6:23)。

同様に私たちも聖霊により教会から家庭の日常生活へ送り出されています。小さな宣教師として働きをしたいものです。

10月26日

### 「自分を憎む者を愛する王」

Ⅱ サムエル 19:1-43

武安 宏樹 牧師

勝利を喜ぶべきダビデ軍は、戦死した息子のため嘆き悲しむ王に遠慮して、民全体が喪に服します。犠牲を払って王のため 戦った民に、労いもないので、見かねたヨアブは「結局アブシャロムだけ生き、私たちは死んだらよかった」と痛烈な皮肉を王に浴びせます。このままだと民 が愛想を尽かして国全体が空中分解すると危惧したからです。加えてヨアブは意味深な発言をしました。「あなたは、あなたを憎む者を愛し、あなたを愛する者 を憎まれるから」(6節)律法と逆ではという皮肉ですが(レビ 19:18)、その延長線上にキリストの愛を無意識の内に示唆したことになります。ダビデは サウルもアブシャロムも、敵ではなく上司や家族という神に与えられた関係として、真剣に愛しました。一方で近しい者を憎むこともありませんが、意図せずそう見えたとしたら、それはダビデの愛の限界だったのでしょうか。息子の死を整理しきれなくとも、悲しみから立ち上がらなくてはなりません。身内の皮肉も愛の裏返しでした。

されどヨアブの訴えは辛辣に過ぎたのか、政治的計算と個人的感情からか、ダビデは將軍の座を敵将アマサへ交替します。身内を退け、遠い者を愛する。一見して外向きの愛ですが、実際はエエカッコシイな愛ではないでしょうか。この愛に引き寄せられたのは前科者シムイとツィバ で、政権が移ると知るや、手のひら返したように好意を得ようと駆けつける。類は友を呼ぶ愛です。それではダビデの自分を憎む者を愛する愛、のろったシムイ をも愛する愛は、間違っていたのか。そうではなく方向性は正しくとも未熟な愛だったのです。近しい者への憎しみを抱えつつ、強引に先立って愛を表そうとしたからです。心の傷をいやすのは何か。死んだ息子を悼んでも、自分やヨアブを責めても、解決しません。神の時の流れの中で、完全な愛の御手を待ち望むことです。そのために献身的な愛の人、メフィボシェテとバルジライが遣わされます。自分の分け前よりも王が無事なら満足。負担になるから恩返しも辞退したい。彼らを通して、傷ついた心に染み入るように神の無条件の愛を教えられます。キリストの愛は近い弟子たちから遠い異 邦人まで、同心円状に拡がる愛です。私たちの愛はダビデのように不完全、しかし完全な聖霊の愛が臨在されます。この愛に満たされて、エエカッコシイや心の 傷から、私たちは解放されます。

11月2日

## 「試みはつづく」

Ⅱ サムエル 24:1-25

武安 宏樹 牧師

本章は 21 章前半部のサウル一族の流血の罪への怒りと、対称されており、主が「この国の祈りに心を動かされた」ことで結ばれます。結論から言えば、ダビデの人口調査が悪かったですが、それ自体は合法的でした(民 1:17-19)。

主は以前から怒りを燃やされ、ダビデを人口調査に向かわせます(1節)。理解が困難ですが、①ヨアブの疑問＝国力は兵でなく 主の祝福による(3節)、①サタンの介入＝ヨブ同様に高慢を砕かれる(Ⅰ歴 21:1)、がヒント二点です。一言で言えば調査の動機が不純だった。神の栄光ではなく自分の栄光のため、兵力を把握して自分の計画で動かそうとした。動機を祈りで問うこともせず、側近の反対意見にも耳を貸さず、数字のシミュレーションに没頭してしまい、自分が神となっていたところに、親和性を覚えるサタンが近づいてきます。サタンの目的は罪を拠点に配下に置き、神に敵対させ、最後は滅ぼしますが、神の目的は悔い改めによる再生ですから、霊的な二重構造にあると言えます。

事後にダビデは「良心のとがめ」(10 節)を覚えます。御心に背いて罪を犯し、頑迷なサウルと違い、ダビデは聖霊のうめきを察知する柔軟さがありました。膨大な兵の数に幻惑され、僅少な兵力でも真実を尽された主を無視していた。ヨナタンの言葉が突き刺さります(Ⅰサム 14:6)。ダビデにさばきが下りますが、悔い改めによる寛容策で選択肢を与えられ、短期集中の懲らしめを選びます。とはいえ 王だけが罰を受けるのではなく、7万の民が打たれるやりにきれなさ。出来心で罪を犯す重大さと、王として謙虚さと知恵と祈りの必要を覚えます。罪だけでなく王の責任感まで問われることで、ダビデは砕かれ練られました。

祭壇に犠牲を奉献する姿は別人のようでした。無償提供を申し出られても、断り代価の支払いを申し出る姿に誠実さと、キリストの贖いの原型を見ます。アラウナはイサク奉献(創 22:)、ソロモン神殿(Ⅱ歴 3:1)の地でもありました。そもそも神が誘い込んだ人口調査の目的とは何だったのか。実はダビデを、信仰成長へと誘って、いよいよ救い主の栄光を示す器へと練り上げたのです。こうして王と民とは一つとなって、神は「この国の祈りに動かされた」のです。

11月9日

「祈りに心を動かされる神」

Ⅱサムエル 21:1-22

武安 宏樹 牧師

21～24章は本書の付録、サムエル記全体とダビデの働きの結果部分であり、6つの主題が同心円を構成します(図はリビングライフ 2005年11月号抜粋)。

- A サウルの契約破棄によって下されたききん(21:1-14)
- B ペリシテとの一連の戦い(21:15-22)
- C 主が施された救いに対する賛美(22:1-51)
- C' 自分と自分の家に向けられたダビデの歌(23:1-7)
- B' ダビデの勇士たちの名(23:8-39)
- A' ダビデの悪しき人口調査とそれによる懲罰(24:1-25)

ききんはパレスチナ地方で、民に悔い改めを迫るためよく用いられました。前王朝の咎で償いを申し出るのは、ダビデの自虐的な罪意識からではなく、「主のゆずりの地」を祝福できない、ギブオン人との関係回復のためでした。要求通りサウルの子孫7名を、罪の代価として差し出したのは気の毒ですが、神はイスラエルにも異邦人にも、契約に誠実な方であり誠実を求める方だと分かります。人間的には恩を仇で返すようですが、もし滅ぼさなかったなら、主の御声に従わない罪に問われます。人を愛することと、神を愛することは、時に相反するよう見えますが、優先順位の問題です。さばかれた7名には、サウル&ヨナタンの遺骨と一緒にして、丁寧な合同葬儀で敬意を表すことで、ダビデ王朝はサウル家の血と骨の叫びを鎮めて、正当な後継者となりました。

7名への断罪とききんの終了の因果関係は、本書には記されていませんが、ダビデが御心を求めてから、神が祈りを受け入れて心を動かされるまでに、何往復ものコミュニケーションがあります。それこそ契約による愛の関係で、サウルにないものでした。神が最も悲しまれるのは、罪を犯すことよりも、悔い改めの促しのサインを無視すること。受け取って赦しを得て成長します。私たちの身の上で起こる試練を信仰的に捉え、小細工でなく誠実に従うこと。荒野でつぶやいて、試練から逃げようとしてばかりでは祈りは聞かれません。ヒゼキヤの祈りに寿命を伸ばされ、ヨブの求めに天から答えられたように、神はコミュニケーションから祈りを聞き、聖霊は心の動きを連動させます。

11月16日

## 「救いの主」

Ⅱサムエル 22:1-51

武安 宏樹 牧師

本書結論部分第2弾はダビデの感謝&賛美で、詩18篇とほぼ同じですが、本書冒頭から通読すると歴史的&心理的背景がわかるのは、大きな恵みです。「すべての敵の手から救い出された日」、また結論部分にあることを踏まえ、サウルの迫害下にとどまらず、バテ・シェバと罪を犯して苦しむ時期も含め、敵の手からの解放とは何かを、ダビデの生涯全体から味わいたいと思います。

ダビデ契約で は彼の生涯の「これまで」と「これから」が語られます(7:8-9)。泥だらけで末っ子として羊を追う少年時代に、神が呼び出して油を注がれた。そして「すべての敵を断ち滅ぼした」のは、万軍の主が彼の前で戦われたから。結びの祈りでは、何の屈託もなく同意&従順する「聖い」彼の姿がありました。その後に罪を犯したことは、完全な献身を志す彼には絶望なのでしょうか。悔い改めてもなお刈り取りの苦しみにもがく中で、彼は憐れみに出会います。

「死の波」とはヨナが投げ込まれた海を、「滅びの川」は「ベリヤアルの川」や「奈落の激流」(共)と訳され悪魔的存在を想起させます。ダビデの若かりし頃、彼の依り頼む信仰基盤は、主に従い罪を犯さない生活こそ勝利の秘訣でした。けれども罪を犯して以来、敵は外から以上に内側から襲うようになりました。内なる敵は自分の罪に端を発し、霊的に深い部分を痛めつけるので厄介です。彼は親族や部下の反乱に無力となり、腰抜けの王から人心も離れていきます。かくて滅びの川に立つダビデは、傍らで水死体のサウルの弱さを理解します。

よみの底から天の宮までどれほどの隔たりがあったのか。彼は叫びました。敵への恐れなど忘れるほどの圧倒的な聖い神が、外の敵も内の敵も砕かれた。「引き上げる」=「モーセ」の語源です(出2:)。彼は滅びの川と対岸の広い地へ導かれます。「その広さ・長さ・高さ・深さ」「隔ての壁を打ちこわす」(エペ2:3)神の愛が救います。神の「謙遜」(36節)という表現はここにしか登場しません。「汝の謙卑われを大ならしめたまへり」(文)天を押し曲げる神が卑しくなり、その御性質は主イエスの姿に現されます(マタ11:28-30)。神の聖と愛の両立に、本書はハンナに始まり、ダビデに至って存在論的な主への賛美に帰結します。

11月23日

## 「とこしえの契約と勝利」

Ⅱ サムエル 23:1-39

武安 宏樹 牧師

前章の詩は主が与えられた勝利への凱歌でこれまでの御業を、本章の詩はイスラエルの主権者が人ではなく神であることを預言的に、各々賛美します。8節以降は、王国が王だけでなく、多くの勇士に負っていたことを示します。2つのテーマを通し、多くの器官からなるキリストのからだが見えてきます。

### ① とこしえの契約からの展望(1～7節)

ダビデが最後のことばとして語り継いだのは、自分の功績や苦勞話でなく、「主の霊は、私を通して語り」(2節)と、主なる神との関係で語ることでした。「エッサイの子」とは羊飼いの出自を、軽蔑また尊敬の念を込め用いられます。系図を辿れば、曾祖父母はボアズと異邦人ながら信仰告白者となるルツ夫妻。12人中4番ながらヨセフ救済を指揮しつつ、遊女(嫁)を買う失態を犯すユダ。胎内から兄を出し抜く歪んだ人格ながら、練られて王国の父となるヤコブ。しみと傷ばかりの系図の中で、信仰のバトンが渡されたのは全く不思議です。その背後で神主導の契約に人が信仰で応答して、神の国は成長していきます。

### ② 3人&30人の勇士たちの名(8～39節)

勇士たちの名の記録は、王国の歴史に刻まれる必要があったからでした。ヤシヨブアム&エルアザル&シャマの抵抗で、ダビデ軍は劣勢を挽回します。21章後半の勇士たちは不気味な巨人を、三勇士は夥しい数の敵を倒しました。彼らはダビデの水一杯の渴望を真に受けて、命を省みず敵陣を抜けて持参し、血に等しい水として祭壇に捧げられます。他に30数名の勇士が記されますが、「ヘテ人ウリヤ」(39節)も含まれます。王国は勇士の血のにじむような活躍と、流されるべきでない血が流されることで、王国の表と裏の面が暗示されます。人間的評価が困難ですが、強調点は「主は大勝利をもたらされた」ことでした。

### ③ 王国の功労者は？

本章全体で強調されるのは、ダビデの遺訓でも勇士たちの功績でもなく、契約の民とされた恵みと、たくさんの勇士たちの名と功績の記録によって、しみもとがも尽きない王国へ、多くの恵みが注がれたことが浮き彫りとなる。そのように私たちはイスラエルの彼方に、キリスト中心の教会を仰ぎ見ます。教会内の人間的功績への固執をパウロは嘆息しますが(Ⅰコリ1:)、誰とかが何とか、特定しきれないのが、キリストのからだの多様性に注がれる聖霊の恵みです。

11月30日

## 「神の民の回復

イザヤ 54:1-17

武安 宏樹 牧師

イザヤが預言者として働いた期間は、北王国滅亡から南王国の捕囚までの、国際的には周辺国の脅威に晒され、国内的には為政者が欲望のままふるまう、不安定な時代でした。1～39章は審判、40～66章は終末的希望が記されます。前章では主のしもべが贖いを成し遂げ、死を打ち破る預言がなされますが、本章では「主のしもべたち」(17節)と、彼に連なる者たちの祝福が語られます。「わたし」「あなた」の夫婦関係のたとえは、新約時代には神と教会との関係に昇華します。本書は39:27の巻数からしても、旧新約聖書の縮図のようです。まず1章で語られるのは、神に背いて傷だらけになった主の民の惨状でした。イザヤは預言者として語る以前に、聖なる主との邂逅で自らの汚れを示され、自ら贖いの恵みを味わうことで、耳しいた民へ語る召しを受け取りました。

本章で女は夫に愛され、子を与えられて、幸いな人生を送る道を捨てて、自分勝手な道を歩みます。自分を創造し、全能の手で守ってくれるのにです。そのような妻に対して離縁が認められます(申24:4)。傷物の妻を喜ぶ夫などいません。人間的に考えれば復縁は不可能ですが、一つ違うことがあります。それは夫の愛が、超自然的な憐れみ(ヘセド＝アガペー)ということでした。主のあわれみとは、離婚と違い断たれることのない平和の契約的な愛です。むろん放浪の罪を見過ごしはせず、罪に怒りを発し、悔い改めを要求します。されど帰還した者を「怒らず、責めない」(9節)、無条件の愛で受け容れます。「聖」と「愛」が両立することで、神の愛の「広さ・長さ・高さ・深さ」(エホバ3:18)が、身に沁みて分かります。不安定な時代に語るべきは、この強い愛なのです。

聖なる愛で受け止められるだけでなく、夫婦が一体となって敵と戦います。もはや過去の罪状を恐れる必要はない。契約の愛をもって主が味方されます。この愛の幕屋を基盤に、不妊の女が子を宿し、育った子は知恵と平安を得て、いよいよ教会は堅くされ、増え広がっていきます。主の臨在を伴う幕屋には、多くの民が身を寄せます。先に捕囚を控え、しばし絶望感に陥る時が来ます。試されるのは、役に立たぬ目先の利益でなく、私たちが何を信じるかです。創造主&贖い主&万軍の主は誰にも負けない愛で、私たちを支えられます。

12月7日

### 「神の招き」

イザヤ 55:1-13

武安 宏樹 牧師

1節の原文では「来い」が3回&「買え」が2回と、力強く招きが語られます。「金を払わないで買え」とは矛盾した表現ですが、代価は既に払われています。こんな素晴らしい契約の民でありながら、なぜ民は出てこようとしないのか。対価を支払わないと、礼拝的&経済的に生きる達成感を得られないからか。人の罪深さは自分が赦されていないと思いついて、その空白を埋めるために、労働も奉仕もすることで、彼らは恵みから離れた自己中心に陥っていました。悪い行いをしたから罪という以前に、恵みを受けない「的外れ」=罪なのです。

本章前半は飢え渴く者への招きですが、後半では赦しの面が強調されます。「求めよ」=「尋ねよ」(文語訳)は、主が見出される場所に喜んで行く意味です。「お会いできる間に」とありますが、主は時間指定で離れる方ではありません。むしろ主は常に近くおられますが、民が勝手に遠いと思いつくことで(59:)、不信から耳と霊的感覚が鈍くなり、それでも彼らは偶像に固守します(44:)。主イエスは自堕落なサマリヤの女に御自分から歩み寄られて、声をかけます。彼女は飢え渴いていました。水や男では満たされず、主を求めていました。井戸水を汲んでからでもマトモになってからでもなく、その場で求めました。いのちの水が彼女の内で泉となり、多くの人々がそれを受け取ります(ヨハ 4:)。そのように主は、私たちが一歩近づくことを求めておられます(新聖歌 188)。御子は天の御国から地の底まで、罪人の救いのため近づいてくださいました。今やその泉はキリスト者の中で聖霊の臨在をもって、あふれ流れています。

主は求める者の近くにおられ、臨在をもって祈りに答えてくださる方です。その御言葉は私たちに喜びと平安を伴って成就し、被造物も主を賛美します。「いばら」は御子が代わりに冠としてくださり、私たちの罪の根を引き抜かれ、香り高き美しきミルトスの花(ハダサ=エステル)の別名)が、心に咲きます。いのちの水は自堕落な女を、主に与えられた使命に生きる女に変えました。

12月14日

### 「公正を守り、正義を行え」

イザヤ 56:1

武安 宏樹 牧師

「公正」の意味を辞書で引くと、「公平で偏っていないこと」と出ています。「正義」についてプラトンは、「個人あるいは共同体で調和が完成されている」としています。共同体は国家でも学校でも町内会でもルールが存在しますが、ルールを守ること＝正義とは必ずしも言えません。「悪法もまた法なり」では、よくありません。それでは聖書で言うところの「公正」「正義」の基準は何か。それは世の法のことではなく、神から与えられた聖なる律法を指しています。たとえば、十戒後半の社会的規定である「殺すな」「盗むな」「偽証するな」は、世界中の国家の法のみならず道徳の規準となっています。十戒後半部分は、前半の創造主を愛することが前提となるので、「公正」「正義」は神から来ます。世界中に罪や戦争が蔓延していても、最低限の秩序が維持されていることや、人が自ら神を求めずとも最低限の良心が保たれているのは、御手によります。けれどもそれだけでは正義を行うことはできません。「義の奴隷」(ロマ 6:18)は、救われたキリスト者が聖霊の働きの中で、初めて律法を全うできるからです。

本日は総選挙ですが、特別秘密保護法や集団的自衛権による戦争準備や、そのためのマスコミ統制、自民族中心主義で周辺諸国を貶めるかと思えば、大国には媚び、表面の数字をつり上げて強きを助け弱者から搾取する経済、総仕上げとしての改憲問題など、公正とは程遠い恣意的政治が目にとります。これらは表向きは政治的な右とか左、政策の相違とかの問題に見えますが、「殺すな」「盗むな」「偽証するな」が脅かされているということは、本質的には、十戒前半の礼拝対象、つまり「神対神々」の霊的闘いが顕在化したと言えます。それゆえ「公正を守り、正義を行う」ことは、今の日本に最も必要なことです。それは真の神を信じ、聖書的価値観を有する者にしか行うことができません。キリスト者はマイノリティかも知れませんが、正義の実現のために戦うのは、真の意味で神の造られたわが国を愛し、同様に隣人である諸国を愛するのは、私たちだから可能なことです。曲がりくねった道ではなく、まっすぐな道を。公正が行われなければ警告を与え、公権力以上に悪しき霊と祈りで戦うこと。正義を行う者の多くは歓迎されませんが(マタ 5:10-12)、彼らの証しを見て、神を求める者が起こされます。それはステパノの殉教で明らかです(使 7:)

12月21日

「砕かれた人の心を生かすために」

イザヤ 57:15

武安 宏樹 牧師

「盛り上げよ。土を盛り上げて、道を整えよ」(14節)その道は人道ではなく、舗装された高規格道路を意味します。心の中に神に通じる道を整え(40:3-4)、「つまずき」を取り除く。その暁には人の力ではどうにもならない凸凹道が、主の力によって舗装道路に変えられる。そのために私たちは道備えを行う。とはいえ南ユダ王国の現状は王自ら義人を虐待と苦難に遭わせ(Ⅱ列 21:16)、民は彼らを心に留めず、偶像礼拝と不品行に明け暮れる腐敗した状況でした。取り除けと言われても、見渡す限りつまずきばかりで、誰も道を通れません。預言者の職務は罪の指摘ですが、どんなに語っても絶望的につまずきだらけ。されど悔い改めと彼方に見える道備えの希望を語るのが、彼らの務めでした。

「心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。」なんど苦難のしもべ御子であった。それは聖なる方&高くなります方というだけでなく、この腐りきった世の中に降臨し、住まれ、生活をされ、寝床すら与えられない義人たちと共に住む。「心砕かれ」「へりくだり」は主観的な謙遜ではなく、客観的に厳しい試練から、ずたずたに切り裂かれて、辱められて、心の痛みによって傷ついた状態です。御言葉を語るイザヤが彼方に見たのは、最も高い方が傷ついた者となって、備えた道の上を歩きながら、虐げられた民を新生される恐るべき真実でした。高い方でありながら低くなられたのは、罪人と共に歩み たからでした。

イザヤは神の聖さを体験して砕かれましたが(6:)、もっと強烈だったのは、聖い方がイザヤよりも義人たちよりも、誰よりも木っ端微塵に砕かれたこと。キリストのへりくだりを「謙遜」で間に合わず、「謙卑」と呼びますが(ピリ 2:)、復活&昇天&高挙を成し遂げられ、卑しめられても神の子と証明されました。そして主が通られた凸凹道は、石一つない平坦な高規格道路に開通しました。その道は世の中で滅多に見られず、金や努力や才能で得られず、上昇志向の人の目には分かりませんが、砕かれ&苦しむ人にはすぐ近くにあると分かる、身近な存在となりました。この救いのバイパスは天から地上へ下向きだから、私たちも砕かれた心で、共に住み活かす御霊のいやしと慰めを受けましょう。

12月28日

### 「試みはつづく」

Ⅱサムエル 24:1-25

武安 宏樹 牧師

本章は21章前半部のサウル一族の流血の罪への怒りと、対称されており、主が「この国の祈りに心を動かされた」ことで結ばれます。結論から言えば、ダビデの人口調査が悪かったですが、それ自体は合法的でした(民1:17-19)。

主は以前から怒りを燃やされ、ダビデを人口調査に向かわせます(1節)。理解が困難ですが、①ヨアブの疑問＝国力は兵でなく主の祝福による(3節)、①サタンの介在＝ヨブ同様に高慢を砕かれる(I歴21:1)、がヒント二点です。一言で言えば調査の動機が不純だった。神の栄光ではなく自分の栄光のため、兵力を把握して自分の計画で動かそうとした。動機を祈りで問うこともせず、側近の反対意見にも耳を貸さず、数字のシミュレーションに没頭してしまい、自分が神となっていたところに、親和性を覚えるサタンが近づいてきます。サタンの目的は罪を拠点に配下に置き、神に敵対させ、最後は滅ぼしますが、神の目的は悔い改めによる再生ですから、霊的な二重構造にあると言えます。

事後にダビデは「良心のとがめ」(10節)を覚えます。御心に背いて罪を犯し、頑迷なサウルと違い、ダビデは聖霊のうめきを察知する柔軟さがありました。膨大な兵の数に幻惑され、僅少な兵力でも真実を尽された主を無視していた。ヨナタンの言葉が突き刺さります(Iサム14:6)。ダビデにさばきが下りますが、悔い改めによる寛容策で選択肢を与えられ、短期集中の懲らしめを選びます。とはいえ王だけが罰を受けるのではなく、7万の民が打たれるやりにきれなさ。出来心で罪を犯す重大さと、王として謙虚さと知恵と祈りの必要を覚えます。罪だけでなく王の責任感まで問われることで、ダビデは砕かれ練られました。

祭壇に犠牲を奉献する姿は別人のようでした。無償提供を申し出られても、断り代価の支払いを申し出る姿に誠実さと、キリストの贖いの原型を見ます。アラウナはイサク奉献(創22:)、ソロモン神殿(Ⅱ歴3:1)の地でもありました。そもそも神が誘い込んだ人口調査の目的とは何だったのか。実はダビデを、信仰成長へと誘って、いよいよ救い主の栄光を示す器へと練り上げたのです。こうして王と民とは一つとなって、神は「この国の祈りに動かされた」のです。